



旭川医科大学



Environmental Report

環境報告書

2014



旭川医科大学学章

雪の結晶により北海道を、旭川市民の木「ナナカマド」により旭川をイメージすることができ、その中央の医大の文字により、北海道の中央にある「旭川医科大学」をイメージしています。



旭川医科大学ブランドマーク【コンセプト】

旭川医科大学のイニシャル「A」をストライプで図案化しています。また、右上がりに跳ねる様は、豊かな自然の旭川から医療人および研究者を育成し、地域に根ざした医療および福祉のさらなる向上(発信)を表現しています。紫は、ラベンダーの景観や医療の英知・国際貢献、緑は再生や生命の輝きを意味しています。

CONTENTS

- 01 旭川医科大学学章
旭川医科大学ブランドマーク【コンセプト】
旭川医科大学環境方針
CONTENTS
ごあいさつ

- 03 開学40周年
開学40周年記念行事の実施
40年の沿革

- 05 I 教育・研究
ミッションの再定義
学生のキャリアプラン支援と相談体制充実強化
ディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)及びカリキュラム・ポリシー(教育課程編成・実施の方針)の策定
「平成25年度北海道科学技術奨励賞」受賞
北海道地区国立7大学での教養教育単位互換協定締結
白衣式の挙行及びスチューデント・ドクター認定証の交付
図書館増築
高大病連携による「ふるさと医療人育成」の取組
高校生による地域医療討論会
環境教育の紹介

- 11 II 病院運営
二輪草センター
肝臓病教室
糖尿病教室
腫瘍センター(ほっとピアセミナー)
術前診察室を整備しました
内視鏡下手術支援ロボット「da Vinci」を導入しました
入退院センター拡充
正面玄関コンシェルジュの配置

旭川医科大学環境方針

基本理念

旭川医科大学は、自然豊かな北海道の北部・東部の中心にあり、その教育・研究及び診療などに伴う全ての活動において、人と自然が調和した社会環境の保全・改善のために配慮が必要と考え、常に環境に配慮した取り組みを目指します。

基本方針

旭川医科大学は、基本理念を実現するために、以下のことについて実施します。

- 1 本学における教育、研究及び診療において、人と自然が調和した社会の環境を保全・改善することに努めます。
- 2 地球環境の保全・改善のため、地域社会との連携を強め環境問題の解決に努めます。
- 3 環境関連法規、条例及び協定を遵守するとともに、環境に与える負荷の低減に努めます。
- 4 この環境方針を達成するために、職員及び学生などと協力して環境に配慮した取り組みの実施体制を確立するとともに環境目標を設定し、広く公開します。

国立大学法人 旭川医科大学長 吉田 晃敏

17 III 社会・国際貢献

ベトナム社会主義共和国政府より旭川医科大学に盾と感謝状が贈られました
旭川ウェルビーイング・コンソーシアム「健康体感教室」AWBC学生組織「はしっくす」2013年度の活動
わくわくサイエンス
北海道メディカルミュージアム
自己決定を考える絵本の出版
旭川医科大学、北海道社会事業協会富良野病院及び富良野市との連携協力協定調印式を行いました
ウェルネットリンク
39派遣講座
NBC災害・テロ対策研修 in つくばに参加して
2013年北海道DMAT実働訓練参加報告
旭川空港「航空機災害消火救難活動訓練」に参加
医師派遣による被災地医療支援
地域に密着した救急医療の充実とさらなる取組
JICA研修員の受け入れ
旭川医科大学派遣講座実施状況
公開講座実施状況

25 環境配慮活動への取り組み体制(大学概要)

位置図/キャンパスマップ
組織機構図
法人役員数等
実施体制
大学教育及び病院理念と目標
環境目標・計画と自己評価(平成25年度)
環境報告書記載事項等の対応表

29 事業活動に伴う環境負荷低減への取り組み

太陽光発電
グリーン購入・調達状況
旭川市の気象条件
エネルギー・資源の使用量

33 認定証・指定書・第三者意見

認定証・指定書
結び・編集後記
第三者意見
環境報告書の作成に当たって



ごあいさつ

国立大学法人 旭川医科大学長
最高環境責任者

吉田 晃敏

旭川医科大学は、1973(昭和48)年の建学以来40年余、「地域医療に根ざした医療および福祉の向上」の建学理念の下、広く北海道における医学研究の拠点として、重要な役割を担ってきました。

特に、地域間の医療格差是正を目指して、1999(平成11)年、全国に先駆けて設置した遠隔医療センターは、現在までに日本国内のほか、アジアやアメリカなど国外へも拡大し、いまや59の国内外の医療機関とネットワークを形成しています。

これら最先端 I C T 技術が融合した施設とともに、本学が誇るかけがえのない「宝」といえるのが、遙か大雪山連峰の山並みを望む豊かな自然環境です。寒暖差60℃を超える厳しい気候風土が、四季折々を通じてドラマチックな風景を演出しています。

とはいえ、加速する地球温暖化の影響から、私たちの街もまた逃れることはできません。旭川は、1902(明治35)年1月に、正式の気象観測所の記録としては日本の最低気温となる、-41℃を記録した地としても広く知られていますが、近年の最低気温は-25℃前後となっていて、平均してここ100年で10℃ほど上昇していると考えられています。

地球温暖化の進行により、「これまで経験したことのないような」集中豪雨、「記録的な」大雪・猛暑等の異常気象の発生が増加しています。

環境の急激な変化をもたらしているのは、私たち人間の所業です。

振り返ってみれば、この地球の歴史は、人間が引き起こした過ちによって、しばしば大きな代償を支払われてきた歩みでもあります。2011年3月に発生した、東日本大震災の大惨事は、人間の傲慢さと、それに対する代償の怖さを見せつけています。

環境問題を地球規模で考え、地域で行動していくには、どうすればいいのか。

次世代へと命をつなぐ、この「かけがえのない地球環境を守っていくこと」は、命と向き合う医療現場に身を置く私たちにとっても、極めて重要な使命です。

本学のミッションを果たすべく、教育・研究・診療・社会貢献の分野で教職員が一丸となって、新たなチャレンジを続けていくとともに、地球環境の保全を重要な課題と位置づけ、私たち大学人が、自らの責任を自覚し、日々の具体的な行動へとつなげていくことを、ここに宣言いたします。

旭川医科大学 開学40周年

旭川医科大学は1973年の創設以来、「地域医療を担う新たな人材育成」という理想を旗印に、約4,700名の有為な人材を送り出し、また、北海道における医学研究の拠点として重要な役割を果たしてきました。2013年には開学40周年という節目を迎え、医学科の機能強化の柱、いわゆる「ミッションの再定義」を完成させました。新たなスタートを切り、更なる教育・研究・医療の発展、意欲ある医療人の育成、そして社会貢献に、一層力を尽くしていきます。

開学40周年記念行事の実施

本学は、昭和48年11月5日、国立の新設医科大学の第一号として開学しました。「地域医療に根ざした医療、福祉の向上」を旗印に開学し、以来40年間、地域はもとより、国内外の医療機関、研究機関、行政機関など幅広い分野へと活動の範囲を広げてきました。

この歩みをさらなる未来へとつなぐため、平成25年11月5日(火)、「開学40周年記念行事」として、「記念講演会」「記念式典」「記念祝賀会」を開催しました。

- 記念講演会 (15:00~16:00 旭川市民文化会館)
- 記念式典 (17:15~18:20 旭川グランドホテル)
- 記念祝賀会 (18:30~20:00 旭川グランドホテル)



記念講演会では「旭川市民の健康を日本一にするための私の提言—102歳の長寿の実績をふまえて—」と題して、聖路加国際メディカルセンター理事長・旭川医科大学元参与 日野原重明先生にお話をいただきました。

会場は大・小ホール合わせ1,800名の定員のところ、旭川市内外から4,200名を超す申込みがあり、大盛況のうちに終了しました。

その後、会場を旭川グランドホテルに移し、文部科学省の中岡審議官をはじめ、地元の国会議員など多数の来賓のご臨席のも

と、記念式典・記念祝賀会を挙行了しました。

記念式典では、吉田学長から、国際認証に対応できる新たなカリキュラムの作成や研究面での組織改革、病院への大型機器導入など、次の時代を見据えた様々な改革に着手するなど機能面での改革に加え、総合研究棟の全面改修など、環境面の整備も行い、教育・研究・診療そして社会貢献も活性化し充実してきたことや、本学のミッションを再定義したことから、開学40周年を節目として、更なる教育・研究・医療の発展、意欲ある医療人の育成、そして社会貢献に一層力を尽くしてまいりたいとの式辞がありました。その後、文部科学大臣をはじめ、来賓の方々から心のこもったご祝辞をいただきました。

記念祝賀会では、元本学設置協力会理事で伊藤組土建株式会社取締役名誉会長の伊藤義郎様から、本学が旭川市への設置が決定されるまでの、当時の苦労話を交えたご祝辞をはじめ、その他来賓からご祝辞をいただいた後、歴代学長・病院長、職員OBと現教職員が一堂に会して、この40年の足跡を振り返り、和やかに歓談しました。



40年の沿革

- | | |
|----------------------------------|--------------------------|
| 昭和47. 7. 1 旭川医科大学創設準備室設置 | 平成19. 1. 1 病院感染制御部設置 |
| 昭和48. 9.29 旭川医科大学設置 | 5. 1 病院腫瘍センター設置 |
| 11. 5 第1回入学式挙行政 | 平成20. 2.13 病院診療技術部設置 |
| 昭和50. 4. 1 附属病院創設準備室設置 | 5.15 病院呼吸器センター設置 |
| 昭和51. 5.10 医学部附属病院設置 | 平成21. 7. 8 病院緩和ケア診療部設置 |
| 昭和54. 4. 1 大学院医学研究科設置 | 8. 1 病院栄養管理部設置 |
| 平成 8. 4. 1 医学部看護学科設置 | 9. 9 臨床シミュレーションセンター設置 |
| 平成12. 4. 1 大学院医学研究科を大学院医学系研究科に改称 | 12. 9 病院入退院センター設置 |
| 大学院医学系研究科に修士課程看護学専攻を設置 | 平成22. 2.17 地域医療教育学講座設置 |
| 平成15.11. 5 開学30周年記念式典挙行政 | 3.24 脳機能医工学研究センター設置 |
| 平成16. 4. 1 国立大学法人旭川医科大学発足 | 4. 1 復職・子育て・介護支援センター設置 |
| アドミッションセンターを入学センターに改組 | 情報処理センターを情報基盤センターに改称 |
| 平成17. 8. 1 医学部附属病院検査部、輸血部を | 4.21 知的財産センター設置 |
| 臨床検査・輸血部に統合 | 10. 1 病院救急部を救命救急センターへ改組 |
| 11. 1 医学部附属病院を旭川医科大学病院に変更 | 平成23. 4. 1 教育研究推進センター設置 |
| 11. 7 病院点滴センター設置 | 動物実験施設、実験実習機器センター、 |
| 平成18. 1. 1 病院地域医療総合センター設置 | 放射性同位元素研究施設を |
| 4. 1 医学科基礎医学1大講座及び12講座を | 教育研究推進センターの技術支援部に改組 |
| 5大講座及び4講座に、臨床医学19講座を | 5. 1 病院リハビリテーション科設置 |
| 2大講座及び14講座に再編 | 11. 1 病院乳腺疾患センター設置 |
| 病院光学医療診療部設置 | 病院理学療法部をリハビリテーション部に改組 |
| 病院理学療法室を理学療法部へ改組 | 平成24.10. 1 地域がん診療連携講座設置 |
| 11. 8 教育センター設置 | 11.14 病院透析室を透析センターに改組 |
| | 平成25.11. 5 開学40周年記念式典挙行政 |



目次・ごあいさつ
開学40周年
教育・研究
病院運営
社会・国際貢献
環境配慮活動・大学概要
事業活動に伴う環境負荷低減への取り組み
認定証・指定書
第三者意見

ミッションの再定義

文部科学省は、平成25年12月18日に医学系分野、平成26年4月21日に保健系分野(看護学・医療技術学、学際・特定)に係る国立大学のミッションの再定義結果を公表しました。

ミッションの再定義とは、各国立大学と文部科学省が意見交換を行い、研究水準、教育成果、産学連携等の客観的データに基づき、各大学の強み・特色・社会的役割(ミッション)を整理したものです。

これに基づき、本学としては、今後、大学の強みや特色を伸ばし、さらなる教育・研究・医療の発展、意欲ある医療人の育成など、その社会的役割を一層果たしていくための機能強化を図っていきます。

医学科のミッション

旭川医科大学の建学の理念に基づき、地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医師・研究者等の養成を積極的に推進する。特に、道内の高校や医療機関と連携し、地域医療に対する強い意欲・使命感を持った学生の積極的な受入れを推進する。

北海道の医療支援の実績から発展した遠隔医療の研究、高齢化に対応した脳機能医工学研究の推進等、地域特性に対応した様々な研究を始めとする研究の実績を活かし、先端的で特色ある研究を推進し、新たな医療技術の開発や医療水準の向上を目指すとともに、次代を担う人材を育成する。

橋渡し研究支援拠点として、基礎研究成果の臨床への応用を強力に推進することにより研究成果の実用化を図り、日本発のイノベーション創出を目指す。

北海道と連携し、道内の地域医療を担う医師の確保及びキャリア形成を一体的に推進し、広大な北海道の医師偏在の解消に貢献する。

地域がん診療連携拠点病院、救命救急センター、地域周産期母子医療センター、地域災害拠点病院等として、地域医療の中核的役割を担う。

看護学科のミッション

旭川医科大学の建学の理念に基づき、地域医療に根ざした医療・福祉の向上に寄与するため、豊かな人間性と思考力、高い倫理観を有する看護職を育成する。特に、臨地実習までの学習成果を確認し客観的臨床能力試験(OSCE)を導入するとともに能動的学修空間を整備するなど、学生の意欲に応えるため、教育内容や学修環境を充実させ、教育効果を高める。

がん看護専門看護師を始め急激な高齢化に対応した高度専門的人材や指導的な人材を育成するとともに、看護職の復職支援等によって看護師不足に対応し、道北・道東を始めとする地域の医療へ貢献する。

遠隔看護の研究等の取組を活かし、広大かつ厳しい気候条件にある道北・道東を始めとする地域の住民の健康保持に貢献する。発展途上国の保健行政・母子保健における医療人材の育成の取組を活かし、国際性豊かな医療人を育成し、国際社会への貢献を目指す。

学生のキャリアプラン支援と相談体制充実強化

本学では、これまで、授業科目担当教員によるオフィスアワーや学科・学年別の学年担当教員配置、さらには基礎医学、臨床医学、看護学科及び一般教育の各担当学長補佐4名と学生との意見交換会を定期的に開催して学生の意見・要望を支援方針に反映させるなど、きめ細やかな指導と教育の充実に努めてきました。

2013年度からは、医学科における修学指導体制をより強化し、卒業後の臨床研修や、将来の地域医療貢献イメージの具体化に向けたアドバイスなど、学生のキャリアプランを支援するため、新たにグループ担任制度の運用を開始しました。

グループ担任制度は、医学科第1学年及び第2学年を対象とし、10名程度の学生グループ毎に臨床医学系の担任教員1名を配置し、学年担当教員と連携して指導・相談を担うほか、年2回、グループの学生と担任との交流会を開催しています。低学年時から臨床教員との接点をより増やすことにより、臨床現場、医療を取り巻く状況や地域医療に対する正しい認識を促すとともに、医師としてのキャリア形成に向けた動機付けや社会への貢献意欲涵養などの効果が期待されることです。また、医学科では、高学年の地域枠学生に対しても、医療人

としてのモチベーションを高め、また将来に対する疑問や不安を解消する目的で、卒業臨床研修や卒業後のキャリアプラン支援に関する学長や関係教員による懇談会を開催するなどの指導活動にも取り組んでいます。本学は、地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医療者育成という教育の理念に基づき、2009年度以降、医学科入学定員の増員措置により地域枠募集比率を段階的に高めてきましたが、現在は入学定員122名に対する地域枠募集人員が計55名(45%以上)という国立大学として最も高い比率となっています。今後、地域枠学生が順次卒業し、卒業生による地域医療への更なる貢献が望まれるところです。

これらのキャリアプラン支援のための取り組みは、入学センター、教育センター、卒業臨床研修センター、地域医療教育学講座による横断的な組織「学生のキャリアプラン支援委員会」が中心となり推進しています。



ディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)及びカリキュラム・ポリシー(教育課程編成・実施の方針)の策定

本学では、建学以来、教育の理念・目標に基づき、学士課程においては医師、看護職者を、大学院課程においては優れた研究者と高度の専門能力を持つ人材を、多教育成して医療・福祉への貢献に努めてきました。

2013年度に、これまでの教育の理念・目標やアドミッション・ポリシー(入学者受入れ方針)に加え、新たにディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)及びカリキュラム・ポリシー(教育課程編成・実施の方針)を策定・公表しました。

新たな2つのポリシーは、医学科、看護学科、修士課程看護学専攻及び博士課程医学専攻において、それぞれで教育の特徴を踏まえて明文化しています。本学における学習成果(ラーニング・アウトカム)をより明確にして教育の質を保証することを目的とし、学習プロセスを中心に考える従来のプロセス基盤型教育から、卒業・修了者が到達すべき目標を明確化し、これらの目標を達成できるような教育の提供をより重視するアウトカム基盤型教育への移行推進の一環でもあります。

学習成果(ラーニング・アウトカム)とは、一定の学習期間終了時に、学習者が知り、理解し、行い、実演できることを期待される到達目標を明示したものであり、本学のディプロマ・ポリシーでは、態度、知識、技能、思考・判断及び意欲・関心の5つの領域で表し、さらにカリキュラム・ポリシーでは、目標に到達するためにどのような内容をどの授業科目で学ぶかを表しています。また、医学科及び看護学科では、学習内容の順次性と科目間の関連性を図示化したカリキュラム・マップを併せて作成し、学生に対してカリキュラムへの理解を深めるよう促しています。

新たなポリシー策定により、本学は、育成する人材像をより明確化することで、教育活動の更なる活性化と、医療・福祉の向上に貢献していきます。

ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーの詳細は、本学ホームページの下記URLに掲載しておりますので、ご覧ください。

旭川医科大学ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー掲載ページ
http://www.asahikawa-med.ac.jp/index.php?f=education_science+policy



「平成25年度 北海道科学技術奨励賞」受賞

空中超音波ドプラシステムを用いた 新規尿流測定装置を開発

腎泌尿器外科学講座 松本 成史 講師

●文部科学省橋渡し研究加速ネットワークプログラムに採択され、空中超音波ドプラシステムを用いた新規尿流測定装置を開発・実用化に向けて奮闘中

昨今の高齢化社会の到来に伴い、中高年以上の男性の多くが排尿障害を訴える前立腺肥大症や同様に多くの女性が悩んでいる尿失禁等の診断・治療において、より自然な排尿状態を的確に診断する必要がある。排尿障害の診断や治療法の選択に、尿流測定装置は泌尿器科を標榜するほとんどの医療機関で設置されている非常に簡易で非侵襲な検査(保険認可)で、表示される尿流波形(排尿パターン)である程度の病態が想定できる。しかし、特殊な環境下での測定であり、普段の自然な排尿環境で検査しているとは言い難く、「より自然な排尿状態を、何時でも何処でも的確に診断する」装置の必要性が望まれてきた。

われわれは、従来型尿流測定装置の「尿器(便器)の側にセンサー式を装備する」という思想を廃し、「排尿を行う人体の側に装備され得る、または独立した動作可能な非接触間接計測方式で測定」できる新規尿流測定装置を開発するに至った。この概念を確立するため、連続波送信によるCWドプラの方式を用いた空中超音波ドプラシステムを援用した装置を開発し、得られた超音波ドプラ波形をスペクトラムに変換することで、尿流波形(排尿パターン)が得られることを証明し、この「原理確認用センサ」における概要については特許公開されている。本装置の開発は、2011-2012年度独立行

政法人科学技術振興機構(JST)「研究成果最適展開支援プログラム(A-STEP)探索タイプ」の支援を得て、試作品を使用したボランティアで検討した結果、従来型の尿流波形と同等の結果を得ており、定性としては十分なものであることを証明した。2013-2014年度文部科

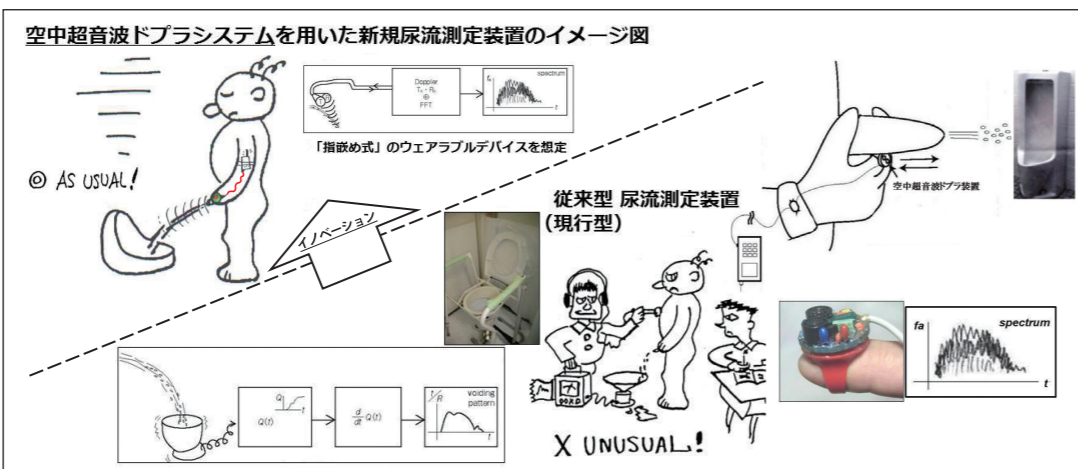
学省橋渡し研究加速ネットワークプログラムのシーズにも採択され、プロジェクト責任者として、実用化に向けた研究を継続中である。その成果は、文部科学省橋渡し研究加速ネットワークプログラム平成25年度成果報告会(2014年2月28日:東京)でも発表した。また、文部科学省(MEXT)科学技術・学術政策研究所(NISTEP)発行の雑誌『科学技術動向』2014年3・4月号(143号pp.19-27.)でも取り上げられた。

●新発想の装置の開発で、「平成25年度北海道科学技術奨励賞」を受賞

北海道科学技術奨励賞は、北海道を主な拠点として北海道の発展に寄与する科学技術上の優れた発明、研究を行い、今後の活躍が期待される若手研究者を対象とした知事表彰で、今回「空中超音波ドプラシステムを用いた新規尿流測定装置を開発」に対して、2014年2月20日に札幌で開催された贈呈式に出席し、この名誉ある賞を受賞させて頂きました。

●管理医学・予防医学、および過疎地域での将来性

この新規尿流測定装置は従来型と比較して、携帯型であり、被検者個人が保持可能な簡易装置であるため、個々で自己の尿流測定が行えるので、自己管理医学ないしは予防医学などの観点からも有用である。また、被災地や道内の泌尿器科医療過疎地域、高齢者の在宅、または老人保健施設での遠隔医療にも有用性を見出せる可能性があり、また既存市場での代替獲得としての新規装置の魅力だけでなく、ヘルスケア分野においての使用も将来性が見込まれる。



北海道地区国立7大学での教養教育単位互換協定締結

2014年2月に、本学を含む北海道地区の国立7大学間(北海道大学、北海道教育大学、室蘭工業大学、小樽商科大学、帯広畜産大学、旭川医科大学、北見工業大学)で、教養教育の単位互換に関する協定が締結され、各大学の教養教育を充実させることを目的に、国立大学教養教育コンソーシアム北海道が結成されました。

協定締結により、教養教育に関する授業科目を他の大学に在籍する学生が受講できるとともに、それらの授業科目を学生が在籍する大学の単位として認めることができるようになりました。各大学の特色や教員の専門性が反映された授業科目を補完しあい、これまで以上に多様で効果的な教養教育の実施が可能となり、より多様かつ深い知識が修得できるようになります。また、文系・理系の様々な学生との共学効果も期待されることです。

果も期待されることです。

単位互換科目は、双方向遠隔授業システムを利用し、映像や音声等を他大学に同時配信する形で開講され、配信先大学の学生が、配信元の大学と同様の臨場感の中で授業を受けることとなります。



白衣式の挙行及びスチューデント・ドクター認定証の交付

医学科では、第4学年の冬季から臨床実習が開始されますが、学生が実習に取り組む心構えを明確にするとともに、医師としてのプロフェッショナリズムを意識してもらうことを目的に、2012年度から白衣式を挙行しています。

2013年度の白衣式は、128名の学生を対象として2月14日に挙行されました。吉田晃敏学長からの祝福と激励のメッセージの後、学生一人ひとりが、同期の友人たちの前で教員から白衣を直接着せられ、厳粛でありながら、教員と教え子の間のユーモアが通い合う感動的な場面となっています。白衣授与後は、学生たちが、どのような医師になりたいか学年全体で自らまとめた宣誓文を、皆で唱和する形で宣誓し、患者さんに対して持つべき慈愛の心を深く意識し、職業

人としての責任を改めて心に刻んでいました。

また本学は、2013年度から全国医学部長病院長会議が認定するStudent Doctor認定制度に登録し、臨床実習に臨む医学科学生に認定証を交付することとなりました。この認定制度は、学生の能力・適性を担保するとともに、共用試験(CBT, OSCE)の位置付けをより明確にし、学生の自覚や意欲を高める目的もあって導入されたものです。



図書館増築

2014年8月に竣工した増築棟は、全館が無線LANと空調が整った閲覧・学習スペースで、1階を「動」の空間、2階を「静」の空間としています。1階のアクティブラーニングスペースでは、組み合わせ自由なテーブルと椅子で、少人数から大勢までのグループ学習やディスカッションが可能です。移設されるパソコンコーナーが隣接し、また天井吹き抜け部分では、小規模の講演会やサイエンスカフェといった、図書館が行ってきた様々なイベントの他、学生・職員のプレゼンテーション活動の場としても活用を期待しています。このフロア

全体が、能動的学習空間となります。2階は、1階の賑やかさを遮断するドアを開けると、旭川家具で揃えた一人掛けキャレデスクと、壁に面するカウンター席が並ぶ100席の静謐な学習空間となります。地下には保存書庫を設置し、図書館書架の狭隘化に対応します。増築棟は、既存の建物とは渡り廊下で連結し、セキュリティに考慮した無人開館にも対応します。



「高大病連携による「ふるさと医療人育成」の取組

本学では、地域に根ざした医療を考え、それを実践している人材を「ふるさと医療人」と名付け、その育成に取り組んでいます。そのためには、まず地域に親和性の高い若者を育てることが重要です。本学では入学前から入学後の学部教育・卒後臨床研修にいたる医学教育の中に一貫した人材育成の仕組みを作り、2008年度から実践しています。これが「高大病連携によるふるさと医療人育成の取組」です。特徴は「地域社会が地域の医療者を育てる」ことを重視し、大学での人材育成プログラムを改善するだけでなく、地域社会と連携した人材育成を行うことに重点を置いていることです。

事業の大きな柱は3つです。1つめは入学前からの「医療人としての職業観」の自覚を促すこと。具体的には高校生に対する医療体験実習・ワークショップの提供を行っています。2つめは入学後選抜における地域枠の拡大。3つめは「一貫した重層的な地域医療教育」を整備することです。

1つめの取組では、全道各地の医療機関・進学校と協力し、高校生に「医療体験実習」を提供しています。「高校生のためのインターンシップ」と違う点は、できるだけ体験型の実習を取込み、さらに病院実習の内容とリンクした講演会やグループワークを行っていることです。一連のイベントを継続的に体験してもらうことで、職業観の涵養を狙っています。参加者は医師志望者に限らず、医療系職種を目指す高校生を広く受け入れており、ここで出会った若者たちが将来の地域医療を担う仲間になっていくことが期待されます。

活動が始まった2009年度には13の高校と13の医療機関が参加しました。2013年度は10の高校と10の医療機関で、164名の高校生が医療体験実習に参加しています。開始当初はグループワークを参加高校単位で行っていましたが、最近は各地区で複数の高校を対象として始めています。また道東地区では高校と病院が独自に取組を進める体制に変わっています。さらに2013年度には、本学教員も参加しての地区別

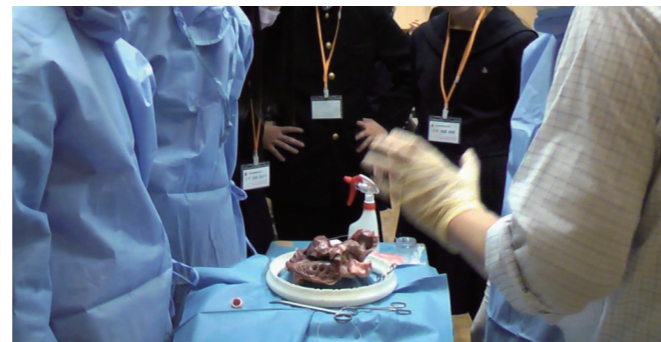
合同ワークショップ(十勝地区・釧路地区)が初めて開催されました。現在は本学入学者の約10%がこの取組を体験しています。

2つめの取組は入試改革です。地域に根ざした医療者の卵を迎え入れるべく、医学科に地域枠推薦入試・AO北海道地域枠入試を導入しました。改革前には40%未満であった北海道出身者は、現在は約60~80%となっています。

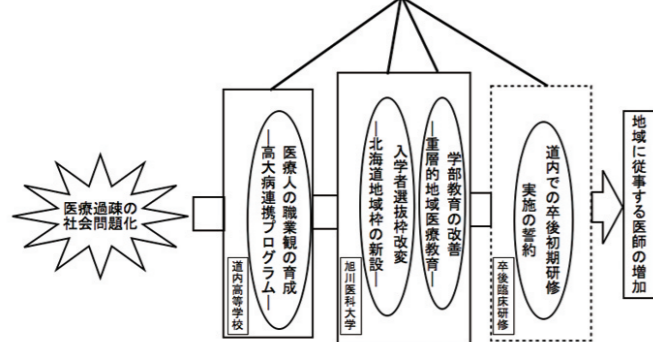
3つめの取組は「重層的な地域医療教育」の構築です。前カリキュラムで導入された早期体験実習や僻地医療実習に一層の連続性をもたせるように変更しました。医学科・看護学科合同の早期体験実習Ⅰでは、旭川周辺の医療機関・福祉施設・介護施設を中心に学生を派遣するように変更。医学科早期体験実習Ⅱでは北海道の二次医療圏を題材とするとともに、フィールドワークを行って質的研究を行うバックグラウンドを育めるように工夫しています。看護学科早期体験Ⅱは、道北地区を中心に地域の病院だけでなく自治体・地元住民とも協力して、地域全体を感じることができるようプログラムとなりました。さらに医学科の僻地医療実習は、2012年度から地域の基幹病院で展開される2週間の「地域医療実習」とし、医学科6年生を派遣しています。こうした変更を通して、「地方での医療の担い手」としてだけでなく、地域社会から求められている「科学者の視点」を持った人材育成プログラムの開発を続けています。

カリキュラム変更によって、グループワークやチュートリアルなど、少人数学習活動を基盤とする授業形態が増加しました。2012~2013年度に行われた講義実習棟の改築では、小さな講義室を少人数学習に適したチュートリアル教室に変更しています。これによって、共用試験OSCEや、今後全国医学部で必須となる卒業前OSCEに対応することも可能となりました。

また卒後臨床研修制度・取組協力医療機関との連携を深め、より地域社会と結びついた「ふるさと医療人」の育成が進むように整備が進められています。



[取組概要図]



「高校生による地域医療討論会」

「高校生による地域医療討論会」は、医療系学部・専門学校への進学を目指す全道各地の高校生が集まる本学主催の討論会です。高校生が意見を活発に交換し、将来どのように社会と関わっていくのかを考える機会となっています。

この討論会は「高大病連携による『ふるさと医療人育成』の取組」の活動から生まれました。2009年度に開催された第1回「高校生による医療体験活動報告会」において、1人の生徒が「高校生同士が地域医療について議論する機会が欲しい」と発言。これがきっかけとなり、本学教職員が参加校に提案し、2010年度に第1回の討論会が開催されました。現在も年度末に「高校生による医療体験活動報告会」と同日開催で継続されています。

討論会は高校生の中から選ばれた生徒2名が司会となり、本学教職員が進行を補助。第3回の討論会からは、学生スタッフがファシリテータとして参加しています。また各地の医師・看護師の皆様から、現場の声を伝えていただくこともあります。テーマは教員から提案することもあれば、高校生の提案で決まることもあります。討論時間は全体で90~100分。最初は緊張して発言できなかった高校生が、「もう少し討論したかった」という感想を持つようになっていきます。これまで行われた討論会のテーマは次の通りです。

- 第1回: 医師不足について
- 第2回: 医師が過疎地に勤務する条件は何か?
- 第3回: 地域医療疲弊の原因を考える
- 第4回: 安楽死について

第4回の討論会には全道各地から89名の生徒が参加しました。教育センター 井上裕靖講師と医学科3年生2名が進行を補助しました。最後には、教育センター長 千石一雄教授から、参加した高校生たちにエールを送りました。

異なる高校に在籍する生徒同士の交流を促し、志を同じくする同世代の若者同士が意見交換できるよう、進行方法を改善しながら今後も事業を継続していく予定です。



「環境教育の紹介」

●環境科学(選択) 対象: 第1・2学年

履修の目的(一般目標): 私たちは身のまわりを取り囲む日常生活から地球環境までの広い環境から影響を受け、また、影響を与えつつ生きています。私たちが生きること自体が環境への負担になりますが、その一方で私たちは文明を発展させ、現在の社会を構築してきました。その中で、利便さを得てきました。自然環境は恒常性を保つ能力が備わっているもののその能力にも限界があります。環境の世紀と言われる現在、私たちもその構成員となっているエコシステムについて考えることは必須となっています。旭川医科大学の学生は、卒業後に医療人として活躍が期待されます。そのため健康を専門的に扱う者として、健康に多大なる相互影響を与え、また、私たちの活動の影響を受ける環境について、日ごろから考え適切に行動することは特に大切です。そうした意識・態度・行動のきっかけとなることを目的とした科目です。

授業科目	担当教員	授業の内容
人を取り巻く環境と人の適応と健康	吉田貴彦	人類が生存することがエコシステムに与える影響、さらに、人を取り巻く環境が人の健康状態に及ぼす影響について概説する。
廃棄物と環境問題	小林 渡	動物圏の物質循環と地球上でめざましい発展を遂げた人類の社会から排出される廃棄物によりもたらされる環境問題について学ぶ。
環境と細胞・遺伝子	秋田谷 龍男	生体は個体・組織・細胞・物理化学変化・生体分子という階層からなるシステムである。外部環境との関係を特に細胞や遺伝子のレベルから考察する。
人が暮らす日常生活環境から受ける健康影響	西條泰明	主にシックハウス症候群・シックビルディング症候群の原因、対策について学ぶ。
地球温暖化問題と低炭素社会の構築 1	張興和	地球温暖化の仕組み・原因物質、低炭素社会構築の可能性・必要性
地球温暖化問題と低炭素社会の構築 2	張興和	クリーン開発メカニズムによる日中間協力、われわれにできること。
酸性雨の原因とその現状	安藤秀俊	酸性雨は、ヨーロッパでは「緑のベスト」、中国では「空中鬼」と呼ばれ、近年わが国でもその被害が拡大している。
環境生物と病原体	吉田逸朗	自然界でのヒト病原体の存続様式と、環境生物がこれら病原体の Reservoir や Vector となる機序を学び、自然環境の変化に伴うヒト感染症の変遷と、その対策に関する理解を深める。
環境ホルモンと食の安全	中木良彦	人間活動の結果として環境中に放出された環境汚染化学物質が、野生生物の生殖機能に影響を及ぼすことが指摘され、ヒトでも同様の影響が危惧された「環境ホルモン問題」について学び、食の安全についても考える。
環境と寄生虫	迫 康仁	寄生虫感染症は、現在の日本ではあまり馴染みがないかもしれませんが、世界的に見ると未だ猛威を振るっています。そこで、その背景にある環境と寄生虫感染症の密接な関係について学ぶ。
森林環境が持つ健康保護効果	住友和弘	森林療法の科学的根拠とその健康づくりへの応用について学習します。森の香りの持つ自律神経系バランス改善効果、抗ストレス効果、血圧安定化作用のメカニズムの概説。海外の事例紹介など。
節足動物と環境医学	中尾 稔	異常気象や災害が感染症に及ぼす影響について、節足動物媒介性疾患を中心に解説する。
生活環境における放射線	高橋康二	放射線の人体への影響を理解し、通常的生活環境の中で被曝する自然放射線の種類・線量・人体への影響や人工放射線による環境の汚染、医療放射線被曝の考え方について学ぶ。
環境衛生と感染症とアレルギー	古谷野 伸	環境衛生が整うと感染症は減少します。一方で衛生的になるとアレルギーが増加するという説もあります。さて我々のとるべき道は?
ライフステージにおける環境問題	伊藤俊弘	環境因子がヒトの健康に及ぼす影響について学ぶとともに、個々の環境因子に対する感受性がヒトのライフステージでどのように変化し得るかを考える。

二輪草センター

二輪草センターは旭川医科大学と附属病院の環境を、より働きやすく、学びやすいものとするために2007年10月に開設されました。

- ・大学という地域社会が子育てを助けます
- ・働きやすく学びやすい環境を整備します

●チャレンジ賞

二輪草センターが北海道から2013年度の男女平等参画チャレンジ賞を受賞しました。この賞は2004年に設立され、毎年北海道内で男女平等参画社会の実現の機運を高める活動をしている個人や団体が表彰されています。受賞は、私たちが2007年から旭川医大と附属病院が男性にとっても女性にとっても働きやすく学びやすい場所であるようにさまざまな取り組みをしてきたことが評価していただけたものと思ひ、大変うれしく思います。立派な賞状は高橋はるみ知事から直接、お祝いの言葉とともにいただきました。この賞に恥じないようにさらに良い活動を展開してまいりたいと思います。

●ひまわり褒章

2013年10月、日本看護協会の推薦を受けて、NPO法人ひまわりの会が主催する「ひまわり褒章2013」の「参加団体賞」を受賞しました。

ひまわり褒章は、出産・育児・母子保健の現場で顕著な活動をされた方々や自治体の政策や企業・団体の積極的な取り組みを表彰し、全国の妊婦さん、子育てを行うお母さんや家族の皆様にお知らせすることを目的としています。

本学の二輪草プランの一つであるバックアップナースシステムや復職支援プログラム等、出産・育児・介護などの役割をもつ看護職が安心して勤務を続けるための活動が評価されました。今回の受賞は、大学と病院が一丸となって働きやすい職場環境づくりに取り組んできたこと、職員一人ひとりの声を二輪草センター事業に活かす風土が根付いていたこと、そして、何度も改良し、実践し続けてきたことの成果であるといえます。

●おイネ賞

間宮敬子副センター長が特別賞を受賞した『第1回西予市おイネ賞』が一冊の本になりました。二輪草センターで本の貸し出しを行っていますので、どうぞご利用ください。

おイネ賞：医学研究や医療活動に活躍する女性を奨励するための賞です。



教育センター准教授
間宮 敬子



チャレンジ賞授賞式(道庁にて)



高橋はるみ北海道知事視察



ひまわり賞受賞 上田看護部長(右端)

設立の経緯と歴史、効果

旭川医科大学二輪草センター(復職・子育て・介護支援センター)は2007年度文部科学省「社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」に採択されたのをきっかけとして同年10月に開設されました。同予算が終了後は2010年度から旭川医科大学の組織として活動しています。これによって育児休暇取得者の増加、女性医師の准教授・講師数の増加、看護師の離職率の低下などの効果が得られています。さらに2012年2月には東日本の大学病院として第1号の「働きやすい病院評価」を認証されました。2014年1月には、センターの活動が北海道からも高く評価され、2013年度北海道男女平等参画チャレンジ賞「輝く北のチャレンジ支援賞」を受賞しました。

復職支援

●復職支援教育プログラム

医師・看護師の資格を持つ休業者及び休業予定者に潜在人材登録をして頂き、育児情報や復職に必要な復職支援教育プログラムを提供しています。在宅学習用DVDの送付、復職前の実習・実技訓練、復職後のサポートを行うことで、安心して復職でき、職場定着率も上がっています。

●潜在看護師と潜在助産師のための復職支援研修

旭川医大への就職を目的としたものではなく、旭川市および近郊の看護師・助産師不足の解消と、地域医療への貢献を目的としています。2014年は3月3日から5日間の実技や講義を行いました。

●多様な勤務形態

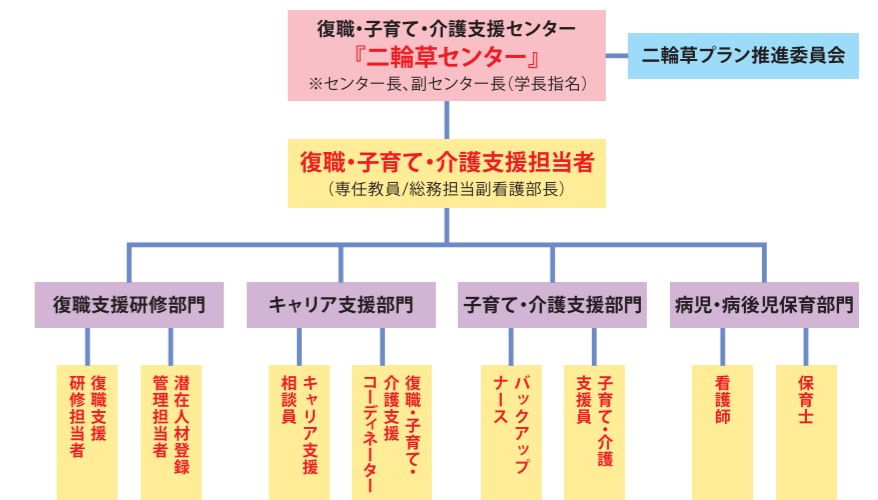
開設当初から、復職支援研修プログラムや多様な勤務形態によって、育児中の医師・看護師が働きやすい環境を提供してきました。二輪草卒業生は医師向けの育児短時間勤務制度です。2012年からは利用できる対象を、従来の就学前の児童がいる職員から、小学校3年生までの児童がいる職員へと拡大しました。

キャリア支援

●学生へのキャリア教育

2010年度からは医学科3年生にワークライフバランスを考慮してもらった必修の授業を開始しました。2013年度は丸一日か

復職・子育て・介護支援センター組織図



けて講義を行いました。学内の育児中の医師の体験談などを聞いた後、「子供の病気」「転勤」「進路」「留学」「子供の教育」に関連する実話に基づいたシナリオについて男女混成の小グループで自分だったらどうするかを話し合い、解決策をグループごとに発表してもらいました。

●合同入局説明会

働きやすい職場を目指して各科でどのような取り組みが行われているか、学生に広く周知することで医師不足を解消することを目的としています。2013年度は「イクメンプロジェクト25 in 旭医」と題して、女性医師と結婚した男性の体験談を聞きました。

○特別講演

徳倉 康之氏(NPO法人ファザーリング・ジャパン事務局長)「ママはドクター、パパはイクメン」が最強カップル?!

○イクメンパネル討論

賀来 敦先生(岡山家庭医療センター 医師・薬剤師)

山本 雅大先生(病理学講座腫瘍病理分野)

関 智行さん(医学科6年)

さらに各講座のイクメンを紹介したポスターを展示しました。



●看護学生と看護師のふれあいランチタイム

看護学生と看護師の交流の場を持ち、就職後のキャリアアップや育児支援策などの情報交換や意見交換を行っています。



●語る夕べ(医学部学生と女性医師・看護学生と看護師)

旭川市医師会女性医師部会と協力して、年1度、ロールモデルの多様な働き方などの情報提供や、小グループの座談会による意見交換などを行っています。



●地域で働く看護職のための生涯学習支援研修

訪問看護に必要な知識と技術を再学習する・大学病院と訪問看護ステーションの交流を図ることを目的として、2013年度から開始。2日間の日程で講義と実技を行いました。



二輪草セミナー

学内外の講師をお招きして情報交換を行っています。子育て中の職員も参加しやすいようにランチタイムに開催しています。2013年度は以下のセミナーを開きました。

○「やらないで後悔するよりやって後悔するほうがいい～いかにして両立しているか教えます～」

講師：菅野 恭子先生(二輪草センター助教・皮膚科医師)



○「知っていますか? 輝くナース part II」

講師：栄養サポートチーム専門療法士 瀬戸谷 千晶さん
認定IVR看護師 渡邊 香留さん
医療リンパドレナージセラピスト 平田 三佳さん

高い専門知識と技術をもって活躍している看護師さんの体験談を聞くことで、子育てをしながらも仕事を継続していけば、将来は専門性の高い資格を取得することもできると感じていただけたと思います。



子育て・介護支援

①バックアップナースシステム

「子どもが病気の時はそばに付いてあげたい」という親の思いを大切にしようというコンセプトで作られたシステムです。経験豊富な3名のバックアップナースが代理勤務を行います。毎月15回～25回程度の利用があります。

②病児一時預かり室

子どもの急な発熱等の場合、代理の勤務者に業務を引き継ぐまでの間(原則1時間)、二輪草センターでお子さんをお預かりします。保育士資格のある職員が担当し、料金は無料です。

③キッズスクール

学童保育サポートの一環として、夏休み・冬休みに職員のお子さん20名余りを3日間程度お預かりし、お子さんが一人で留守番する状況を少しでも回避しようと開催しています。

キッズスクールで最もありがたいのは学生ボランティアの存在です。本学の医学科、看護学科の学生が毎回多数参加し、子ども達と共に活動しています。なかでも、学生サークル「ぬいぐるみ病院プロジェクト」の皆さんは、ダンスや寸劇を交えながら子ども達に授業を展開してくれます。リピーターの学生さんも多く、子どもたちに次のキッズスクールでの再会を熱望されています。このような学生さん達の姿は、子ども達にとって身近なロールモデルとなり、また、学生にとっては子ども達との関わり方を学ぶ機会となっています。

2013年度の夏休みキッズスクールは「自分の身体を知ろう～骨の模型標本をさわってみよう」というテーマで、冬休みキッズスクールは「自分の身体を知ろう～歯の働き・虫歯の予防」というテーマで授業や体験によりさまざまなことを学んだほか、運動や工作、おやつ作りなど盛りだくさんの活動で終了しました。子どもと親の両方に毎年大変好評をいただいています。



●歌って踊れる『二輪草キッズのテーマ』ができました

2013年7月、医学科卒業生の菅原基史先生が作詞、佐々木満ちる先生が作曲、皮膚科の高橋千晶先生が振付を担当していただき、キッズスクールのテーマソングができました。

二輪草センターHPにて、子どもたちと学生ボランティアの皆さんが歌って踊っている様子を公開中(学内限定)。アドレスはこちらです。

http://www.asahikawa-med.ac.jp/hospital/nirinsou/kids_school/kids_school_song.html

二輪草キッズのテーマ

作詞：菅原 基史
作曲：佐々木 満ちる
振付：高橋 千晶

♪=100

D G A D D G

み どりにも え ろ おかのう え み らいにか がやく
ふ りはし ろめ ろ おかのう え は るには なさく

A D D G A D

ほくらたち がんばるババと ママのもと

D G A D G

なかよくんきに すこやかに みんなで
みんなのために がんばるぞ

D/F# G/E A

おこえで こえあわせて うたお!

病児・病後児保育室『のんの』

病気や怪我により学校や保育園に行かせることができない時、どうしても仕事が休めない状況の時、休暇を取ることに罪悪感があるという声が多数ありました。また、医療の現場では他の人には代わってもらえない仕事が多々あるというのも事実です。このような、子供が病気だけれど急に休むのが難しいといった状況を解消し、安心して働ける職場環境を整えるため、2009年12月に病後児保育室「のんの」を開設し、2014年7月からは病児・病後児保育室へと利用対象を拡大しました。7月現在の事前登録者数は92名で、月平均利用日数は2010年度の約5.6日から、2013年度は約8.3日と増加し、利用者からは「仕事を休まずに済んで助かりました」「とても心強いシステムです」といった声を頂いております。



肝臓病教室

B型肝炎やC型肝炎などの肝炎ウイルス感染者数は日本で300~370万人いると推測されており、そのうち7割の人は自分が感染していることに気づいていないと考えられています。本人が気づいた頃には肝硬変や肝がんに進行していた方も少なくありません。また、ウイルス性肝炎治療の進歩は著しく、近年、新薬が次々と開発され、治療期間の短縮、効果の劇的な改善、副作用の軽減化がされています。適切な治療を行うことで高い確率で肝硬変や肝がんへの予防が可能になってきており、特にC型肝炎においては9割が治る時代になったといわれています。

このような最新の情報を患者・家族に適切に提供することが重要となっております。

本院では、道北唯一の肝疾患診療連携拠点病院として指定を

受けたことから、2010年より肝臓病教室を開催しており、2013年度は8回開催し400名以上の参加がありました。肝臓専門医を中心に、リハビリテーション専門医、歯科医師、看護師、栄養士、薬剤師、ソーシャルワーカーなどのメディカルスタッフを講師として、最新の治療や検査、日常生活などについて幅広く講演を行っております。また講演終了後には、参加者を対象に肝疾患に関する疑問や不安に対する個別相談を行い、さらには、より多くの方々に最新の肝疾患診療について知ってもらうために、講演のスライドと音声を録画し本院のホームページに掲載するなど、啓発活動を積極的にっております。



糖尿病教室

旭川医科大学病院では、外来通院中の患者さん、入院中の患者さん、そのご家族の方を対象として、「糖尿病教室」を週1回(火・水・木曜日のいずれか)開催しています。糖尿病診療に

おけるチーム医療は重要であり、多くのスタッフが患者さんに関われるよう、医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、臨床検査技師が協働して行っております。

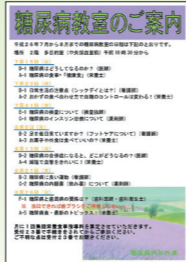
糖尿病教室日程表(平成26年4月~9月)

4月							5月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
	6	7	8	9	10	11	4	5	6	7	8	9	10
13	14	15	16	17	18	19	11	12	13	14	15	16	17
20	21	22	23	24	25	26	18	19	20	21	22	23	24
27	28	29	30				25	26	27	28	29	30	31
6月							7月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
	8	9	10	11	12	13	6	7	8	9	10	11	12
15	16	17	18	19	20	21	13	14	15	16	17	18	19
22	23	24	25	26	27	28	20	21	22	23	24	25	26
29	30						27	28	29	30	31		
8月							9月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
	3	4	5	6	7	8	7	8	9	10	11	12	13
10	11	12	13	14	15	16	14	15	16	17	18	19	20
17	18	19	20	21	22	23	21	22	23	24	25	26	27
24	25	26	27	28	29	30	28	29	30				

4/3(木)~5/20(火) 5/28(水)~7/10(木) 時間/10:30~11:30
7/15(火)~8/26(火) 9/3(水)~10/15(水) 場所/旭川医科大学病院 2階 多目的室(中央採血室前)

※糖尿病教室は①~⑦を1回として開催しています。

テーマ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
	D-1 糖尿病はどうしてなるのか?	A-1 糖尿病の食事=「健康食」	B-1 日常生活の注意点(シックデイとは?)	E-1 糖尿病の検査について	C-1 糖尿病のインスリン治療について	B-2 足を毎日見えていますか?(フットケアについて)	A-3 お菓子や外食は食べていい?
	医師	栄養士	看護師	検査技師	薬剤師	看護師	栄養士
	D-2 糖尿病の合併症になると、どこがどうなるの?	A-4 減塩で血管をきれいに!	B-3 糖尿病に良い運動	C-2 糖尿病の内服薬(飲み薬)について	F-1 糖尿病と歯周病の関係は?	A-5 糖尿病食・最新のトピックス!	
	医師	栄養士	看護師	薬剤師	歯科医師	栄養士	



月に1回集団栄養指導料を算定させていただきます。受付23番で手続きをされた後からご参加ください。ご不明な点は受付23番でお聞きください。糖尿病内科外来

腫瘍センター(ほっとピアセミナー)

がん診療連携拠点病院の取り組みとしてのがん患者サロン『ほっとピア』は今年4年目を迎えます。毎月第2、第4金曜日にがん患者さんとご家族を対象に開放し、交流や情報交換の場として定着しています。また、『ほっとピアセミナー』を毎月第4金曜日の13時から開催、治療やケアなどがんに特化した情報をお伝えしています。毎回20名以上の参加があり、セミナー終

了後には参加者たちが残って『ほっとピア』として情報交換がされています。

平日は仕事や家事で忙しく参加できない患者さんのための『ほっとピア週末サロン』を今年も開催予定で、たくさんの方々に『ほっとピア』を利用していただけるようご要望に応えていきたいと思っております。

術前診察室を整備しました

2013年3月に手術室横に術前診察室を設置し、同年5月から運用を開始しました。

これまで術前診察は病室で実施していましたが、麻酔専門医と術場看護師による診察を実施するため、また、患者さんのプライバシー保護をさらに充実させるために整備しました。

術前診察では、患者さんや家族の方が正しく麻酔を理解し、安心して手術、麻酔に臨めるように、詳しい麻酔の方法や手術前に守るべき事項などについて説明し、説明後に同意書に署名をいただいております。

内視鏡下手術支援ロボット「da Vinci」を導入しました

2014年2月に内視鏡下手術支援ロボット「da Vinci」を使用した手術を道北・道東地域において初めて実施しました。

従来の開放手術と比較して、
(1)傷口が小さい (2)術中の出血量が少ない
(3)術後の疼痛が少ない (4)術後の回復が早い
などのメリットがあり、患者さんにとって低侵襲で、安全性が高い手術と言えます。

現在本院では、保険診療の対象となっている前立腺悪性腫瘍手術のみにおいて対応しておりますが、将来的には消化器外科系や婦人科系などに対応していきたいと考えております。

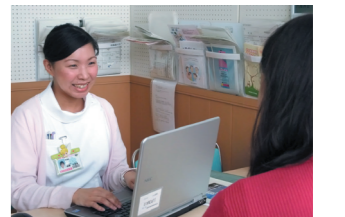


入退院センター拡充

2013年7月に、多くの入院予定患者のケースマネジメントなどが行えるよう、面談室を2室から8室に増やし、待合場所を広く設けて入退院センターを拡充しました。

入退院センターでは、入院予定患者の身体的・社会的・精神的リスクや不安を把握し、その解決に向け専門多職種によるチーム医療を推進すること、並びに入退院に必要な各種手続等の一元化によって、患者サービスの一層の向上に資するこ

とを目的として、2008年4月から入院予定患者のケースマネジメントを開始し、看護師と事務が連携して面談を行っています。開設当初の2008年度は年間約900名が利用しましたが、ケースマネジメント対象診療科の拡大に伴い、2013年度は年間約4,600名が利用しており、多くの入院予定患者のケースマネジメントを行っています。



正面玄関コンシェルジュの配置

本院では、高齢社会への対応について、現状における本院のハード面及びソフト面での課題点を洗い出し、それに対する改善策を検討する高齢者サービス向上WGを設置しています。

そのWGにおいて、正面玄関にコンシェルジュを配置する事を検討し、2014年2月3日より担当1名を配置しました。平日8時30分から12時までの時間帯に正面玄関風除室周辺において、来院・離院される患者さんの車両への乗降の介助や車椅子の用意及び整理等を行い、患者さんを玄関前からホールへお連れし、ボランティアや総合案内スタッフに引き継ぐ業務を行っています。

スタートして間もない事業ですが、患者さんによる利用は

徐々に増え、現在では、月に延べ750名の皆さんに利用いただいております。利用された患者さんから感謝の言葉をいただくなど、ニーズの高さ、コンシェルジュ配置の効果が表れてきています。

雪が多く、寒さの厳しい北海道において、冬場は特に玄関前が滑りやすくなっていること、また、高齢者の方々や体が不自由な方においては、ご家族と車で来られて玄関前で乗降されることが多いことから、正面玄関コンシェルジュによる車椅子の用意や乗降のお手伝いが患者さんやご家族の安全・安心に繋がっています。



ベトナム社会主義共和国政府より 旭川医科大学に盾と感謝状が贈られました

旭川医科大学は2007年から2013年までの7年間、「特定非営利活動法人日本口唇口蓋裂協会」からの参加要請を受け、ベトナム社会主義共和国、ベンチエ省グエンディンチュー病院を拠点とし、主に口唇口蓋裂など口腔・顔面の先天異常患者への治療を行う医療援助に参加してきました。

「特定非営利活動法人日本口唇口蓋裂協会」はおよそ23年間にわたり、ベトナム社会主義共和国やインドネシア、モンゴルなど9カ国で約5千人を治療してきました。これらの地域での口唇口蓋裂を持つ子どもたちは、通常とは異なる顔貌に加え、食事摂取困難、ことばの不自由さなどいろいろな問題を抱え、親たちは子どもの将来に大きな不安を抱きながら生活しています。口唇口蓋裂は日本を含むアジア圏において、500人に1人の割合で発生するといわれていますが、手術を受け言語訓練を行うと、ほぼ正常に回復する疾患です。しかし貧困が多い発展途上国では、経済的な問題に加え、医療体制の遅れなどで満足な治療が受けられない子どもたちが多く存在しています。ベトナム社会主義共和国においても同様に、本学では、歯科口腔外科医師を中心に、麻酔科医師、手術部看護師、そして医学科、看護学科の学生からなるチームで参加、活動してきました。

この度、ベトナム社会主義共和国政府より、長年の国際医療援助、協力活動に対し、盾（顕彰）と感謝状が贈られました。盾は、日越国交樹立40周年（2013年）に際して両国の友好協力について顕著に貢献のあったことに対する顕彰であり、賞状は、ベンチエ省への医療貢献に関する表彰状であることが

明記され、非常に価値の高い賞とのこと。これらの賞は、これまで長年、全国から参加してきた口腔外科医、麻酔科医、小児科医、看護師など多くの日本人医療者が受賞しました。

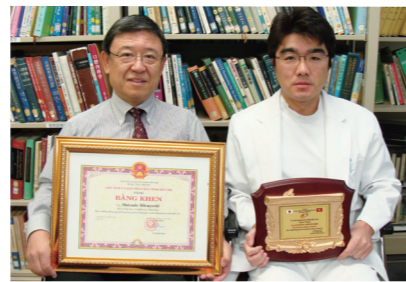
この事業への参加は、旭川医科大学や旭川医科大学病院の絶大な協力、支援があって成されていることであり、今回の受賞は本学の国際貢献に対する質の高さを示しています。本学の多くの医療職員や学生に参加してもらい、国際貢献の素晴らしい部分、困難な部分を知って、本学のより積極的な国際活動の一端を担ってほしいと願っています。

今後も参加要請が続くものと思われ、それに応えるよう継続していく計画です。

歯科口腔外科学講座
松田 光悦



授賞式



歯科口腔外科学講座
松田 光悦教授(左)と吉田 将重講師

旭川ウェルビーイング・コンソーシアム「健康体感教室」

旭川ウェルビーイング・コンソーシアム(AWBC)は2008年5月に旭川市の4大学1短大1高専と旭川市、北海道上川総合振興局とによって組織された高等教育機関を中核とする地域連携体であり、旭川医科大学がAWBCの代表校を務めています。AWBCは地域にある健康に関連する資源を活用することで、地域住民の健康の保持増進と地域の活性化を図ることを目的としています。2012年度から一般社団法人化し、本学学長が代表理事として活動を牽引しています。

健康体感教室は、AWBCが所属する学生に対して、地域にある健康保養資源を活用して「運動」「栄養(食)」「休養」の健康3要素について体感し、生活習慣の見直しと主体的な健康

づくりについて考える機会を提供するために企画されたものです。地域で活動しておられる方々に講師を務めてもらい、地域の活動の理解を深めています。2013年には、乗馬や馬に触れる癒やし、地域の植生を学びながらの散策、運動指導、地元食材を用いたスローフード調理の体験などのメニューを通して健康を考え実践する1日となりました。



AWBC学生組織「はしっくす」2013年度の活動

●かたるべっ!

中高生と普段あまりかかわりのない大学生とが交流できるスペースを街中に設けて、気軽に立ち寄って話ができるようにする。そのことにより、子どもたちの将来に対する不安や、学校での悩みの解消に貢献するという目的のもと、2カ月に一度のペースで行っています。我々「はしっくす」では以前から中高生とのかかわりがあり、毎回、参加者の皆さんには楽しみにしてもらっています。

5月に行われた「かたるべっ!」では「きっかけバス北海道」の皆さんをお招きし、「東北大震災」というテーマで、当時の映像や団体員さんの説明から震災の恐怖や災害に関する知識を学び、皆さんと仲良く話し合いをしました。それ以外に以前行ったテーマでは、「はしっくすの新イベント」や「将来の夢」についてなどがあります。時には熱く議論したり、イベントの立案をしたり、何よりも中高生や大学生の笑顔あふれる場所づくりを心がけ、来てくれたみんなが楽しめるような企画を行っています。



わくわくサイエンス

自然や科学の楽しさ・面白さを子ども達に体験してもらうことを目的として、「わくわくサイエンス」は一昨年、旭川ウェルビーイングコンソーシアム(AWBC)の企画の一つとして発足しました。小学生から高校生までを対象としたこの参加型・体験型の理科実験教室は、子ども達や親子連れを対象としたサイエンスカフェのような気軽さと意外性がある課外授業です。本企画の実施には、AWBCメンバー校の教員やOBのみならず、市内の高校生や大学生も参加します。高校生・大学生にとっては、理科教育実習の体験の場になっています。

具体的なテーマとしては、普段観察することの少ないコウモリや外来種のウチダザリガニの生態を理解し自然環境保全の大切さを学んだり、マウスなどの小動物が反復練習により学習するプロセスを体験したりするコーナーがあり、特に子ども達には好評でした。アンモナイトのレプリカ作製や火山噴火モデル実験を体験するコーナーでは、雄大な地球の歴史を垣間見る楽しさに、会場は熱気に包まれました。また、簡単な装置で立体視を楽しんだり、ミラクルフルーツによって味

●あったかいね、あさひかわ〜つなげよう灯(ともしび)のわ〜

12月22・23日に開催しました。このイベントは2010年から始まり、市民の皆さんと共にスノーキャンドルを作成して、買物公園沿いに並べています。昨年度は、新しくなった駅を拠点として、駅前や駅の裏をキャンドルで温かく飾りました。また、来場者の皆さんに地元産品へ目を向けていただこうと、旭川にある酒造会社「高砂酒造」「男山」から提供された酒粕を使った甘酒の無料配布を行い、スタンプラリーの実施、キャンドルで描いた巨大な世界地図「ゆきだるまマップ」の掲示などの企画を盛り込んでいきました。当日は小さい子どもから大人までたくさんの方々にご参加いただき、ペーパークラフト体験やクリスマスツリーの飾りつけなどを楽しんでいただきました。なお、市内の中高生約100名にボランティアとして手伝っていただき、異世代交流の貴重な場ともなりました。

この行事は旭川市の地域協働のまちづくり事業としての補助が今後なくなるため、どう継続していくかが課題となっています。



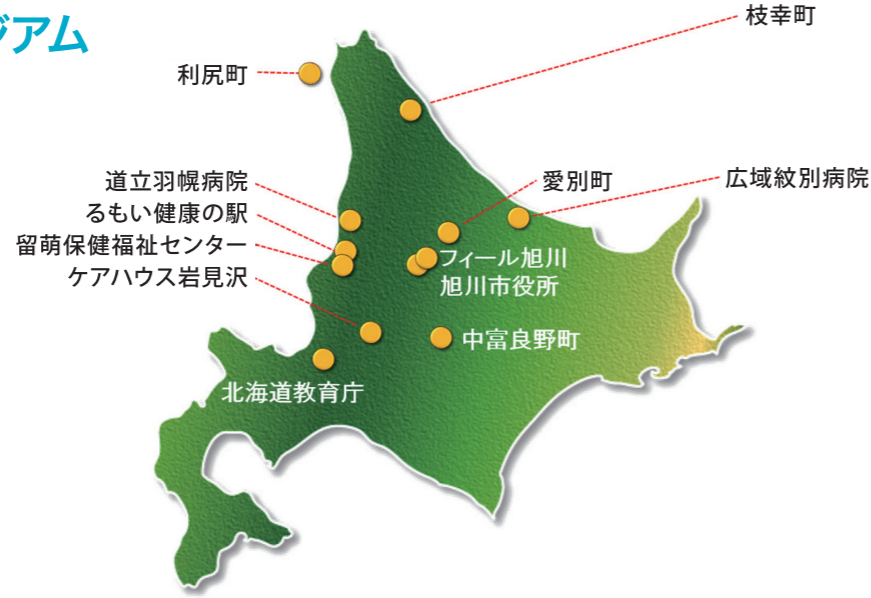
覚の変化を体感できるコーナーは、付き添いの大人達の関心も集めていました。市内の高校生チームは、チョウの鱗粉観察、銀鏡反応、さらには黒色素の秘密など生物・化学の実験コーナーを担当し、楽しく触れ合える学びの場を子どもたちに提供。森林浴コーナーでは、実際に森の香りを体験でき、健康志向の方々には関心の高いテーマとなりました。さらに、パズルや不思議な振り子の動くしくみを体験するコーナーでは、数理分野に興味をもつ中学生や高校生が夢中になる一幕もありました。

本企画は、科学技術振興機構(JST)科学技術コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成地域型」の支援事業として、今後、さらなる内容充実をめざす予定です。



北海道メディカルミュージアム

北海道メディカルミュージアムは本院遠隔医療センターが運営するインターネット中継による医療公開講座です。本院独自の遠隔医療の技術を活用して遠隔地の会場からでも講師に質問ができるように双方向通信を実現するなど全国でも例のない取り組みです。道内どこに住んでいてもインターネットにつながればすぐに参加することができるので参加拠点も利尻、羽幌、紋別など12カ所に拡大しました。



●かんたん、ビデオライブラリー

遠隔医療センターでは、これまでの講演映像をいつでもオンデマンドで視聴できるビデオライブラリー端末を開発して希望する自治体や公共スペース14カ所に無償で貸与しました。この端末はタッチパネルでメニューを選ぶだけなのでコンピュータに不慣れな方でも気軽に立ち寄って利用してもらうことができます。パソコンが使える方は自宅からでも学習できるサイトも用意しています。

(<http://oic.asahikawa-med.ac.jp> または「オープンインターネットカレッジ」で検索してください)



自己決定を考える絵本の出版

人が生きていくことは決定の連続ですが、医療の場面においては、患者さんはより重大な選択、決定を迫られることになります。医療者はそれをサポートする役割を担っていますが、昨今の世の自己決定・自己責任をよしとする流れの中、生命に関わるような決定であっても「じぶんできめること」ばかりが重視され、十分な話し合いやサポートもなく患者さんが決定を迫られることが少なくありません。緩和ケアの現場では、まさに生命や生き方について患者さんと話し合うことが多く、以前からどう話し合うか、いかに決定をしていくのかということが、ひとつの研究テーマでもありました。

そんな中、ひとりの患者さんとの出会いをきっかけとして、自己決定を考える絵本の執筆に至り、無事出版となりました。題名は『じぶんできめるって?』です。小学生のケンタくんは、あるとき母親にこう言われます「ケンタも大きくなったから、これからはじぶんできめようね。」「大人」という言葉の響きに誘われ、ケンタくんは自分で決めるということがどういうことなのか考えるようになります。でも、それは案外難しく、失敗したり怒られたりばかりで、ケンタくんは「じぶんできめる」なんてつまらないことだと思うようになります。しかし、ある日ケン

タくんは本当の「じぶんできめる」に気づくことになるのです。

自分で決めるというのはどの世代にも重要なテーマであると思います。絵本のよさは、世代を選ばないことです。子供は子供なりに、大人は大人なりに理解することができます。2013年度の冬には、この本を持って市内の小学校に読み聞かせに行きました。1年生でしたので、もちろん自己決定がどうだということとはわからないようでしたが、目を輝かせて聞いてくれました。既に違うテーマの第2作も出版されています。今後も絵本を通じた発信を続けたいと思っています。

緩和ケア診療部 副部長
阿部 泰之



旭川医科大学、北海道社会事業協会富良野病院及び富良野市との連携協力協定調印式を行いました

平成26年3月28日(金)午前10時から「国立大学法人旭川医科大学、社会福祉法人北海道社会事業協会富良野病院及び富良野市との連携協力協定調印式」を行いました。

この連携協力協定は、旭川医科大学と北海道社会事業協会富良野病院(以下、富良野協会病院)及び富良野市の三者が連携、協力し、住民が健康で安心して生活できる地域福祉の向上のため、地域医療の安定的な医療体制を確保することを目的としています。

富良野市が、旭川医科大学医学科に在籍する学生及び卒

業生に対し修学資金を貸与し、一定期間、富良野協会病院など富良野市内の医療機関で臨床研修を受けていただくことにより、富良野市の地域医療の現状を知っていただき、将来に向け富良野圏域さらには道北地域の安定した地域医療の形成を目指すものです。

協定の期間は、平成27年3月31日までとしていますが、三者のいずれかからも終了の申し出がない限り、同一の内容を以て更新されます。



ウェルネットリンク

本学では、地域住民のQOL(生活の質)の維持・向上を支援するため、平成21年から、健康や医療に関する情報を自己管理できるウェブサービス「ウェルネットリンク」を運用しています。また「ウェルネットリンク」は、利用者が特定するアドバイザーに対して情報の閲覧権限を与え、自身の健康状態に応じたアドバイスを受けるための機能も有しています。これらの機能を利用して、本学では平成22年12月から、留萌市(北海道)との連携の下、「目の健康チェックサービス」を実施しています。このサービスは、保健師や看護師が「るもい健康の駅」(留萌市内)で撮影した市民の眼底画像を「ウェルネットリンク」に登録してもらい、約70km離れた本学の眼科専門医が「ウェルネットリンク」を介して目の健康状態をチェックするものです。チェックの結果は、「ウェルネットリンク」上で一人ひとりに伝えており、異

常が見つかった場合には、その重症度に応じて「眼底写真にわずかに変化を認めます。自覚症状があればお近くの眼科を受診してください。」または「眼底写真で異常が疑われます。お近くの眼科を受診してください。」のいずれかのアドバイスを行っています。このサービスを受けた市民のおよそ5割に、緑内障や黄斑変性などの眼疾患が見つかっており、疾患の早期発見・早期治療による重症化の回避と、それに伴う医療費の抑制に期待が寄せられています。



サンキュー 39派遣講座

本学では2013年に40周年を迎えることから、39周年にあたる2012年度から地域住民の方々へ日頃の感謝を込め、旭川医大39(サンキュー)派遣講座「知っておきたい旭川医大」を実施しています。

39派遣講座は、地方公共団体や高校などの団体からの申し込みだけでなく、地域住民の方々が個人単位で申し込みすることができる、本学主催の派遣講座です。2013年度は全5回の講義を実施しました。



「知っておきたい旭川医大」

第1回	2013年6月27日	アルツハイマーにならない食べ物を求めて(受講生31名)
第2回	8月21日	高血圧から身を守ろう(受講生30名)
第3回	10月22日	健康食品との上手なつきあい方(受講生23名)
第4回	12月16日	家族の健康について(受講生12名)
第5回	2014年2月21日	アルコールと健康(受講生25名)

NBC災害・テロ対策研修 in つくばに参加して

●NBC災害とは？

Nuclear(核)、Biological(生物)、Chemical(化学)系物質により引き起こされる災害で、最近ではRadioactive(放射性物質)、Explosive(爆弾)によるテロ行為なども含めた災害として、CBRNE(シーバーネ)災害と呼ばれています。

●テロは意外に身近？

日本は6,000人の傷病者を出した地下鉄サリンテロを経験した。最近では道内札幌でもガスボンベを利用した多発爆発事件は記憶に新しい。また、高速道路を走り回っている毒マーク表示のトラックは、我々の日常生活に密着する化学物質の輸送に使われており、その車両事故や化学工場の爆発などはサリン事件さながらの健康被害をもたらす。このように、テロに類する災害はいつでも起こり得る。その時、矢面に立たされる救急外来で、万一の受け入れ態勢確立のための初動のヒントを教えてくれるのが3日間にわたる本研修会である。全国15病院、総勢75名が参集した。

●1日目は講義と机上訓練

初日はCBRNEの最低限の基本知識として、化学兵器や生物兵器の実際とテロ、そして、放射線による健康被害を座学で学んだ。その後、実際の病院受け入れのエリア設定と人員配

置などを病院の平面図をもとに机上で考えるエマルゴを実施した。

●2日目は模擬診療と試験

実際の患者診療に役立つ汚染者の除染の必要性と方法を選ぶ除染前のトリアージ、除染が終わったあとの患者の治療の優先順位を区別する除染後トリアージを模擬患者で訓練した。実際に汚染患者と接する際には防護服を着用するが、防護マスクや手袋を装着した状態での医療処置が患者観察をはじめ、注射1本にも難渋する実情が理解できた。実働訓練に先立ち、筆記試験と実技試験も行われた。

●3日目は実働訓練

防護衣を着用して院内に入るまでの処置を行った。実際に体を動かすことで、座学では分からない実際の問題点などに気づかされた。非常に内容の濃い3日間であったがとても充実し、全体の流れを整理することができた講習会であった。



2013年北海道DMAT実働訓練参加報告

DMATとはDisaster Medical Assistance Teamの略。災害医療援助を行う医療チームで、旭川医大は2隊登録されています。今回の訓練は、青森県東方沖で震度6強の地震が発生し、沿岸部に津波等による多数の傷病者が発生した想定で全道から11チームが参集しました。旭川医大は千歳空港SCU(Staging Care Unit)活動を担当しました。震災時には発災現場の患者のみならず、病院も倒壊やガス・水・電気などライフラインの破たんにより通常の診療を行うことができなくなります。SCUは、発災現場から健全な病院機能を持っている被災地の外に傷病者を航空機などで搬出するための基地で、実際の災害では自衛隊駐屯地などの格納庫に応急的に設置されます。

旭川班は10床SCU内ベッドのひとつを任せ、東日本大震災に出動した看護師らが、実際の石巻での経験を生かした設営を行いました。搬入患者は、重量物に挟まれたのちにクラッシュ症候群を来したものと全身やけどなど、被災地外に早急に搬出して治療を要する重症者ばかり。患者は重症度別に早急な搬送が必要な群、あるいは病状が重篤で搬送に耐えられない不搬送群に選り分けられ、優先順位が決められます。

広域搬送される患者は最終的な治療を行う病院に着くまでに、様々な場所で多数の医療スタッフが関わるため、国で定めている「広域搬送カルテ」が割り当てられ、書式にのっとった確実な記載を求められます。また、実際の搬送では、搬送情報を電子的にやりとりするMATTSと呼ばれるPCシステムがあり、ここにロジスティクスで参加する事務方が関わり、衛星無線などを駆使して患者情報を登録して全国の隊員が情報共有するための訓練も行いました。国が定める災害医療のシステムを利用する過程を学び、有事の際に100%有効活用できるようにすることに重きを置いた訓練といえるものです。医療行為自体は通常の救急外来でもある程度類似の経験を積めますが、このような災害のシステムにふれる経験は得難いもので、院内のDMAT指定隊員は毎年訓練に参加しています。



旭川空港「航空機災害消火救難活動訓練」に参加

旭川医科大学病院は、2013年8月20日旭川市の主催で実施された『旭川空港航空機災害消火救難活動訓練』に、救命救急センターの医師1名、救命救急NSの看護師2名の計3名を救護班(DMAT)として編成し参加しました。

この訓練は、旭川空港に着陸した航空機がスポットイン直前に第二エンジンより出火し、乗員乗客126名のうち重傷者4名、中傷者1名、軽傷者2名が発生(火災による火傷、脱出時における外傷)したことを想定した総合訓練で、消防、警察、医療、空港



等の各機関から22団体、約100名(参加車両21台、ヘリコプター1機)が参加して実施されました。

旭川医大病院救護班は、事故現場さながらの緊迫感に包まれた中で、事故機からトリアージ地区に担架で搬送された負傷者の選別、その後第一救護所において重傷者の各種処置を行う医療活動を担当し、関係者との連携も円滑に行うなど所期の目的を達成し、実り多い訓練参加となりました。

医師派遣による被災地医療支援

東日本大震災により被災地が大きな被害を受けたことから、震災直後の2011年3~5月にかけて、DMAT(災害派遣医療チーム:医師2名、看護師2名および事務職員1名)および医療救護班(10班65名の医師、看護師、薬剤師および事務職員)を被災地に派遣するなど、震災直後の医療救護活動を行いました。

また、被災地医療支援の一環として全国の大学病院と分担し、被災地病院への医師の派遣を継続して行っており、2011年10月~2013年10月までに宮城県公立志津川病院、福島県

いわき市立総合磐城共立病院、岩手県立高田病院、茨城県北茨城市立総合病院および福島県甲状腺検査に10名の医師を派遣しました。この被災地医師派遣は、全国医学部長病院長会議が全国の大学病院の協力のもと、調整を行い派遣しているものですが、同会議は2013年3月にこの支援の功績が認められ、厚生労働大臣から感謝状を授与されました。旭川医科大学は、これまで同会議の一員として被災地への医師派遣に積極的に応じているところであり、今後も医療支援を継続する予定です。

地域に密着した救急医療の充実とさらなる取組

広大な面積を有する北海道において、1人でも多くの生命を守るためには、ドクターヘリの活動は重要です。2009年10月から運航を開始した道北ドクターヘリ事業において消防機関などから受けた出動要請は、2010年度の409件から2013年度は744件と大幅に増加し、ドクターヘリの活用が浸透しつつあり、道北圏の救命救急に大きく貢献しています。

協力基幹病院として、道北ドクターヘリ事業の運航開始以来、救命救急センターの医師や看護師の搭乗要員を積極的に派遣するとともに、自らヘリポートを整備することで救急患者の受け入れ体制を万全としました。2013年度は55名の患者を受け入れるなど、道北圏における地域住民の不安を解消し、安心できる生活環境を守るため、救急医療の充実に大きな役割を果たしています。

しかし、ドクターヘリは有視界飛行を原則としていることから天候に左右され、特に冬期間は雪害による悪天候などにより出動できない場合が多々あります。北海道では新たな取り組みとして、気候に左右されず、夜間も飛行可能な医療用固

定翼機について、2011年度から3年計画による研究運航を実施しました。近い将来、北海道に第1号機が導入されることを期待したいと思います。

旭川医科大学病院は、2003年2月に二次被災医療機関に指定されました。これは泊原子力発電所での事故を想定したものです。近隣の病院が一次被災医療機関として対応し、重症度の高い傷病者は、二次医療機関に搬送されてくることになっています。被災線量が多い場合、東日本では、千葉の放射線医学研究所が対応することになっています。福島第一原子力発電所の事故後は、更なる被災医療の充実が求められていることから、旭川医科大学病院としても二次被災医療機関としての機能を充実するため2013年度には除染テント等を購入しました。今後も除染のシミュレーションを行うなど二次被災医療機関としての機能充実への取り組みを継続していきます。



JICA研修員の受け入れ

国際協力機構(JICA)からの受託で、2つの研修コースを実施しました。

母子保健コース

母子保健看護指導職における母子保健人材(看護師、助産師など)の能力の向上や安全な出産のための各医療システムについて学ぶ「母子保健コース」研修を2013年5月13日～6月21日まで40日間にわたって実施しました。10カ国(コンボ、カンボジア、バングラデシュ、インド、ラオス、モンゴル、ネパール、パキスタン、パプアニューギニア、ボリビア)から、助産師、看護師など11名を受け入れました。

アフリカ地域 地域保健担当官のための保健行政コース

地方保健行政機関で地域保健計画の立案・実施監督・モニタリング評価に携わる行政官を対象に、「アフリカ地域 地域保健担当官のための保健行政コース」研修を2013年7月1日～8月9日まで40日間にわたって実施しました。8カ国(エチオピア、ガーナ、ケニア、レソト、マラウイ、モロッコ、タンザニア、ジンバブエ)から13名を受け入れました。

環境衛生に関する実習として医療廃棄物を含む産業廃棄物処理施設、同最終処分場、一般廃棄物焼却施設、リサイクル施設を、また感染症対策に必須である衛生的な水の確保に関して浄水場を訪れ、研修員の今後の活動に生かせる知識の習得を目指しています。日本での処理方法やその課題を施設の見学と現場担当者の説明を通して考え、環境汚染の防止、医療従事者や住民の感染防御に資する考え方を学びます。また、食品加工残渣を利活用して製造した堆肥を用いた土壌改良と農作物を栽培する地元の中小企業の取り組み

を紹介し、廃棄物の適切な分別やリサイクル、省資源化が、アフリカ地域の別の課題である食糧増産の解決ともなることを知る機会とします。また、食品衛生の観点から食肉加工現場の視察も行っています。



医療廃棄物処理施設



リサイクル施設



廃棄物最終処分場

旭川医科大学派遣講座実施状況

派遣講座は、本学の教員などが地方自治体、高等学校などの求めに応じて講演を行うもので、さまざまな内容の講座を用意しています。350種類の講座があり、内科外科など臨床医学分野をはじめとして、身近な問題である健康や生活習慣病など、多彩な医学分野を取り扱っています。また、医学に留まらず心理学や歴史といった一般教育、高等学校向けの医療職への

進路、青少年の諸問題といった講座もリストに加わっています。

なお、派遣講座の実施件数は年々増加し、2013年度は203件の講座を全道にわたって実施しました。

詳細は本学ウェブサイトをご覧ください。

http://www.asahikawa-med.ac.jp/index.php?f=cooperation+public_dispatch

公開講座実施状況

公開講座は、教育研究活動を通して蓄えた知識と成果を地域に還元するとともに、地域住民の方々に学習の機会を提供することを目的に、1986年度にスタートしました。2013年度は「がんについて」をメインテーマに据えて、全5回の講義を実施しました。

○「がんについて」(受講生54名)

- 第1回 9月17日 骨・軟部組織の腫瘍の治療について
- 第2回 9月24日 化学療法について
- 第3回 10月1日 脳腫瘍の治療について
- 第4回 10月8日 がん化学療法中の日常生活について
- 第5回 10月15日 がんのリハビリテーションについて



■派遣講座地域別実施件数

市町村名等		件数	
上川地方	旭川市	105	
	旭川市以外	士別市	5
		名寄市	3
		富良野市	4
		鷹栖町	3
		東神楽町	3
		当麻町	1
		比布町	1
		東川町	2
		美瑛町	3
		和寒町	2
	剣淵町	2	
	下川町	1	
	小計	30	
小計	135		

市町村名等		件数
上川地方以外の市町村	石狩地方	札幌市 7
	後志地方	江別市 2
	空知地方	小樽市 2
		美瑛市 1
		芦別市 3
		岩見沢市 1
		滝川市 3
		砂川市 1
		深川市 2
		長沼町 5
	胆振地方	雨竜町 1
	日高地方	北竜町 1
		苫小牧市 1
		室蘭市 2
	渡島地方	新ひだか町 3
		函館市 2
	留萌地方	留萌市 3
		遠別町 1
		苫前町 2
		小平町 1
	宗谷地方	天塩町 1
		稚内市 1
		浜頓別町 1
	オホーツク地方	北見市 4
		紋別市 4
		斜里町 2
	十勝地方	佐呂間町 1
帯広市 3		
釧路地方	清水町 1	
	釧路市 3	
根室地方	根室市 1	
	中標津町 2	
小計	68	
合計	203	

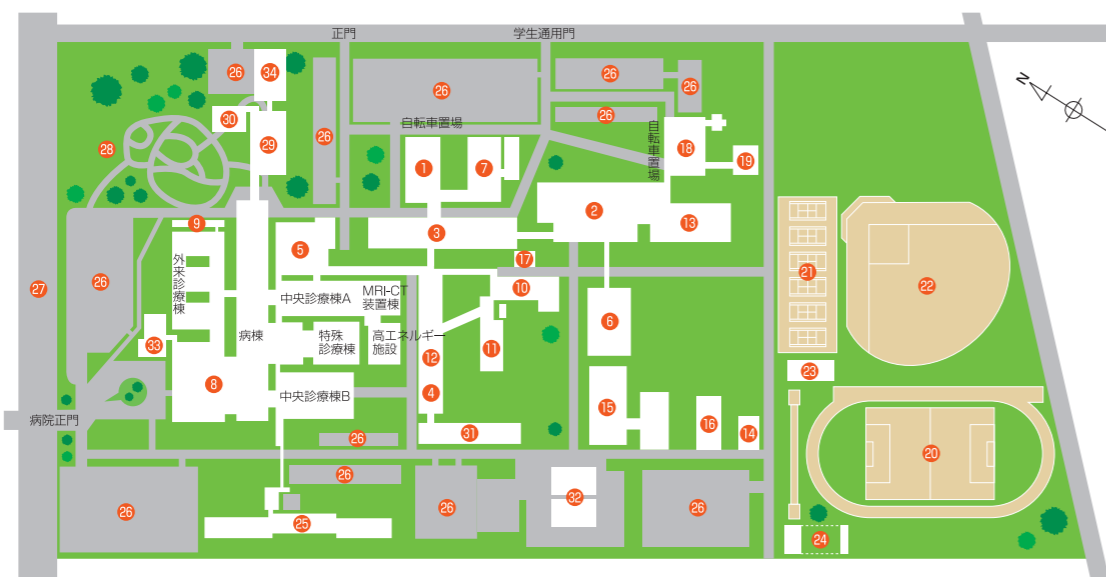
環境配慮活動への 取り組み体制(大学概要)

位置図

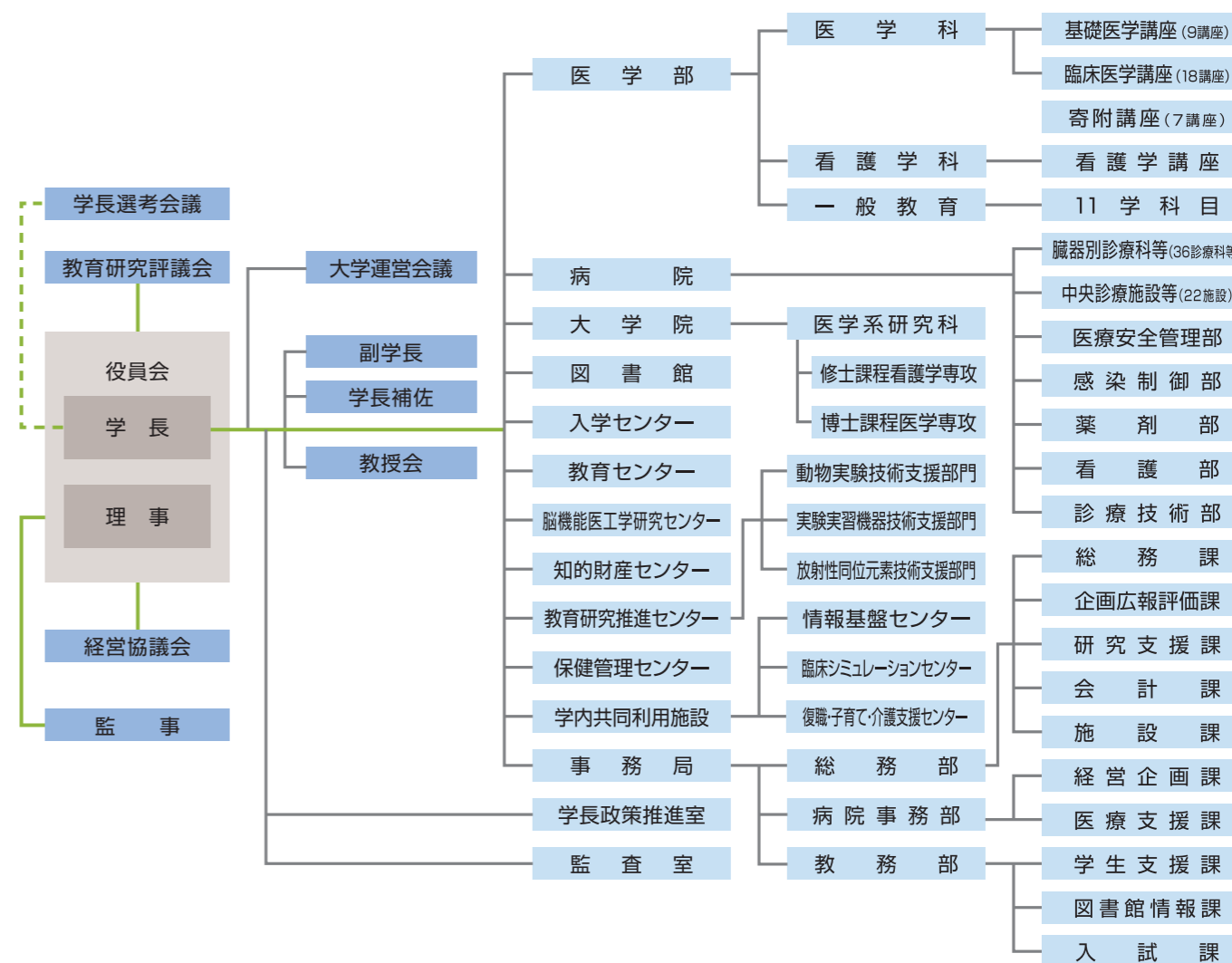


キャンパスマップ

- 1 本部管理棟
- 2 講義実習棟
- 3 総合研究棟
- 4 臨床研究棟
- 5 臨床講義棟
- 6 看護学科棟
- 7 図書館
- 8 病院
- 9 遠隔医療センター
- 10 動物実験施設
- 11 放射性同位元素研究施設
- 12 実験実習機器センター
- 13 福祉施設
- 14 犬舎
- 15 中央機械室
- 16 廃棄物処理施設
- 17 廃棄物保管庫
- 18 体育館
- 19 武道場
- 20 陸上競技場
- 21 テニスコート
- 22 野球場
- 23 体育管理施設
- 24 弓道場
- 25 看護師宿舎・ファミリーハウス
- 26 駐車場
- 27 環状1号線(道道90号線)
- 28 大学の森(屋外リハビリテーション施設)
- 29 共通棟A
- 30 保育園
- 31 共用研究棟
- 32 ドクターヘリヘリポート
- 33 食堂棟
- 34 共通棟B



組織機構図



法人役員数等

平成26年5月1日現在

■法人役員数

学長	理事	監事	計
1	3 (1)	2 (1)	6 (2)

※()内は非常勤役員で内数。

■大学職員数

学長	副学長	教授	准教授	講師	助教	事務・技術職員	技能・労務職員	医療技術職員	看護職員	合計
1	3(1)	62	44	56	171	180	8	117	677	(1) 1,319

※法人役員(学長・副学長)を含む。
※()内は教授と兼務で外数。

■学部学生数

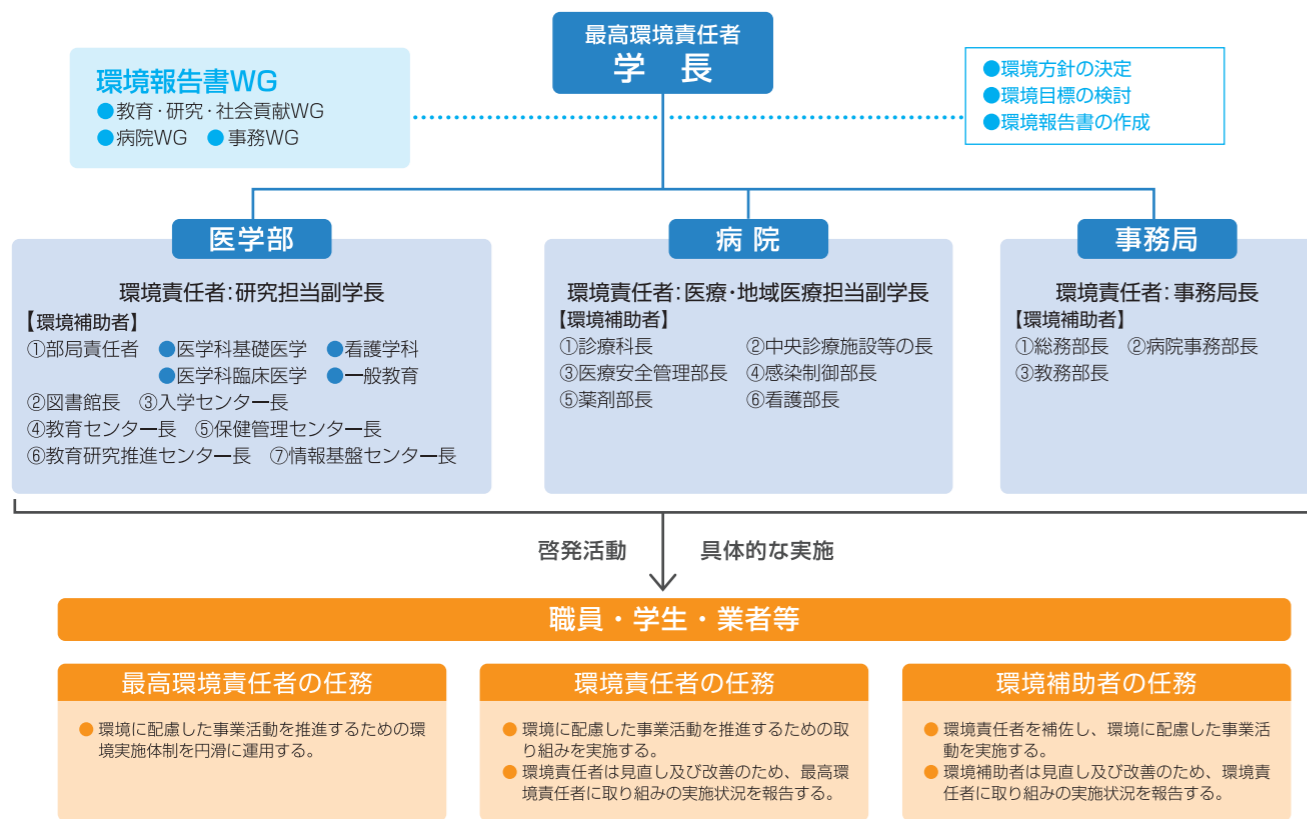
区分	入学定員	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	計
医学科	122	121	135	107	123	128	103	717
看護学科	70	61	60	62	68			251
計		182	195	169	191	128	103	968

■大学院学生数

区分	入学定員	1学年	2学年	3学年	4学年	計
博士課程	15	8	17	21	49	95
修士課程	16	17	26			43

環境配慮活動への 取り組み体制(大学概要)

実施体制



WG：ワーキンググループ

大学教育及び病院理念と目標

大学の教育理念

豊かな人間性と幅広い学問的視野を有し、生命の尊厳と高い倫理観を持ち、高度な知識・技術を身につけた医療人及び研究者を育成する。また、地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医療者を育てる。さらに、教育、研究、医療活動を通じて国際社会の発展に寄与する医師及び看護職者の養成に努める。

大学の教育目標

旭川医科大学は上記の理念の下にこれらを達成するため、次のような目標を掲げる。

1. 幅広い教養とモラルを養うことにより、豊かな人間性を形成する。
2. 生命の尊厳と医の倫理をわかまえる能力を養い、病める人を思い遣る心を育てる。
3. 全人的な医療人能力や高度な専門知識を得るとともに、生涯に亘る学習・研究能力を身につける。
4. 幅広いコミュニケーション能力を持ち、安全管理・チーム医療を実践する資質を身につける。
5. 地域・僻地住民の医療や福祉を理解し、それらに十分貢献しうる意欲と能力を獲得する。
6. 積極的な国際交流や国際貢献のための幅広い視野と能力を習得する。

病院の基本理念

大学病院としての使命を認識し、病める人の人権や生命の尊厳を重視した先進医療を行うとともに、次代を担い、地域医療に寄与し、及び国際的にも活躍できる医療人を育成する。

病院の目標

1. 病める人を思い遣る患者中心で心の通い合う医療を行う。
2. 全人的医療と先進医療との調和を図り、人間本位の医療を提供する。
3. 予防・健康医学などに積極的に取り組み、地域医療や福祉の向上に寄与する。
4. 病める人の人権を尊重し、生命の尊厳がわかる人間性豊かな医療人を育成する。
5. 未来の医療を創造し、その成果を国内外に発信する。

環境目標・計画と自己評価(平成25年度)

2013年度の環境保全活動における環境目標・計画と自己評価を記載します。

平成26年3月31日

環境方針	目標	計画	評価		
環境負荷の低減	エネルギー使用量の削減	冷暖房時の室内設定温度の徹底	○		
		上下階へのエレベータ利用の抑制	○		
		昼休み時等の消灯	○		
		こまめな消灯の徹底	○		
		高効率照明器具への更新	◎		
		照明器具のセンサー化の実施	◎		
		クールビズ、ウオームビズの実施	◎		
		OA機器の省エネモードの設定	◎		
		空調機の省エネ性能の高い製品への更新	◎		
		節水型装置、器具導入の促進	◎		
		環境汚染の防止 (日常的な軽微な汚染の回避) (化学薬品等の安全管理)	廃棄物の分別の徹底による排出量の削減	○	
			両面印刷の徹底及び電子メール等の活用	○	
			古紙回収の拡大とリサイクルの促進	◎	
			廃棄物のマニフェストの完全実施	◎	
教育・環境活動及び 法令の遵守	環境教育 (環境教育の充実) (法令の遵守)	ガスボンベの安全管理及び保管量の確認	◎		
		化学物質の安全管理及び保管量の確認	○		
		実験用設備(ドラフト、薬品棚)の安全管理	○		
		環境関連教育の充実	◎		
		環境関連施設での実地学習	◎		
		実験用廃液の完全回収	◎		
		消防法の遵守(保管量、保管方法の確認)	○		
		特別管理産業廃棄物の処理の適正化	◎		
		グリーン購入の推進	本学グリーン調達方針に基づく 調達の推進	環境に配慮した製品、事務用品等の優先購入	○
				省エネ機器・設備の優先購入	◎
再生品及びリサイクル可能な製品の購入	○				
地域社会との交流	地域社会への積極的な 情報発信と啓発	環境報告書の公表	◎		
		環境に関する講演会、研修会への啓発活動	◎		
		環境関連公開講座等の実施	◎		
		学生の地域交流の積極的参加	○		
		地方自治体主催の委員会等への参加	◎		
その他	環境及び景観の維持向上	大学敷地内全面禁煙	○		
		たばこのポイ捨て禁止	○		
		排水基準の遵守	◎		
		ボランティア活動の積極的参加	○		

注:自己評価の、◎印は目標を充分達成している、○印はおおむね達成している。

環境報告書記載事項等の対応表

環境配慮促進法に基づく記載事項等	概 略	記載内容	掲載頁
1. 事業活動に係る環境配慮の方針等	事業者(法人であるときは、その代表者)の緒言	学長ごあいさつ	02
	事業活動に係る環境配慮についての方針又は基本理念	旭川医科大学環境方針	01
2. 主要な事業内容、対象とする事業年度等	主要な事業内容、事業年度又は営業年度及び組織の範囲	環境報告書の作成に当たって	34
		環境配慮活動への取り組み体制(大学概要)	25-26
3. 事業活動に係る環境配慮の計画	事業活動に係る環境配慮についての目標及び当該目標を達成するために行う取組を定めた計画	環境目標・計画と自己評価(平成25年度)	28
4. 事業活動に係る環境配慮の取組の体制等	事業活動に係る環境配慮についての目標を達成するために行った取組に係る体制及びその運営方法	環境配慮活動への実施体制	27
5. 事業活動に係る環境配慮の取組の状況等	事業活動に係る環境配慮についての目標を達成するために行った取組の状況及び事業活動に伴う環境への負荷のうち一定以上の重要なものの程度を示す数値	事業活動に伴う環境への負荷のうち一定以上の重要なものの決定は、事業者が当該環境への負荷の程度及び環境報告書の利用者にとつての有用性の程度を考慮して行う	事業活動に伴う環境負荷低減への取り組み
			29~32
6. 製品等に係る環境配慮の情報	事業者が環境への負荷の低減に資する製品その他の物の製造等又は役務の提供を行ったときは、当該製品その他の物又は役務に係る環境への負荷の低減に関する情報	(該当なし)	—
7. その他	環境関係法令に基づく規制について行った対応、その利用者等との間において行った意見交換等の概要	第三者意見	34

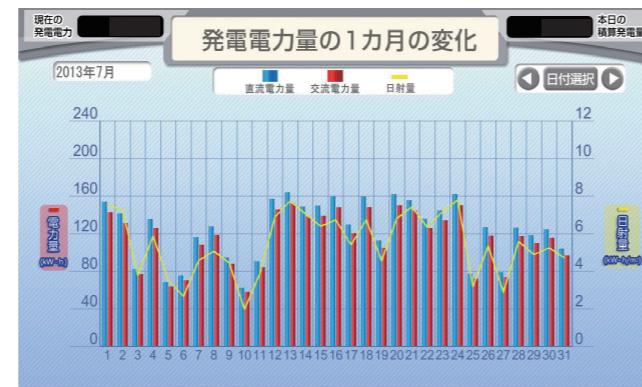
事業活動に伴う 環境負荷低減への取り組み

太陽光発電

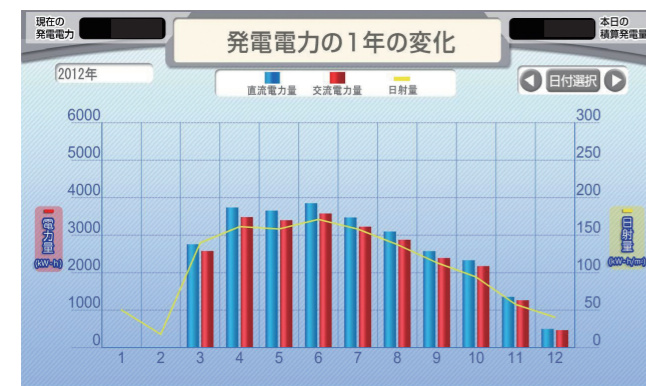
本学では、図書館屋上に30kWの太陽光発電設備を設置し、2009年12月より発電を開始しました。

2013年度の発電電力量は約24,350kW・hで、総受給電力量の0.1%に相当し、CO₂排出量に換算すると14.3t-CO₂の削減に寄与しています。発電量は気象条件などによる多寡はありますが、毎年約2万kW・h以上の電力を発電しています。

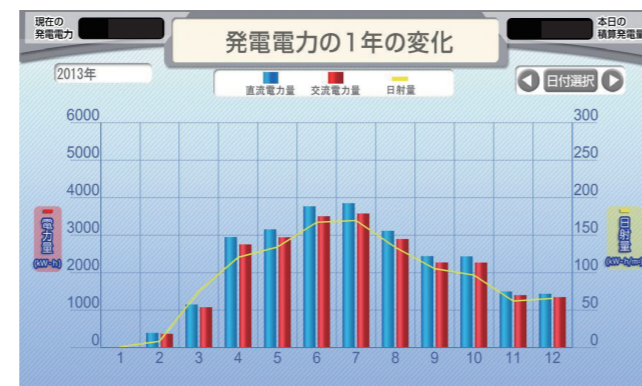
グラフは、中央玄関前に設置したモニター画面の表示で、上段は2013年の発電電力量が一番多かった7月、中段は2012年、2013年の1月～12月までの1年間の発電電力量の変化を示しています。下段は2010年、2011年の1年間の電力量の変化です。



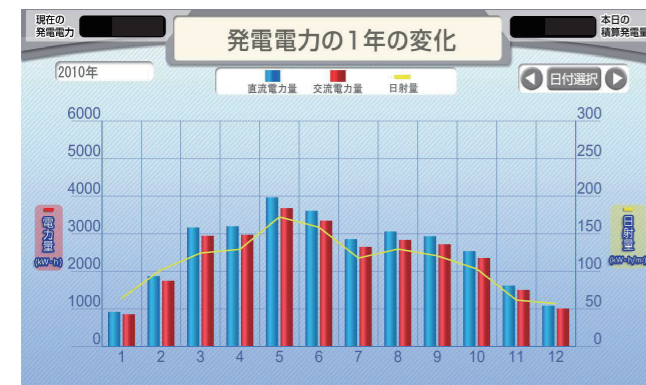
2013年7月 発電量3,573kW・h



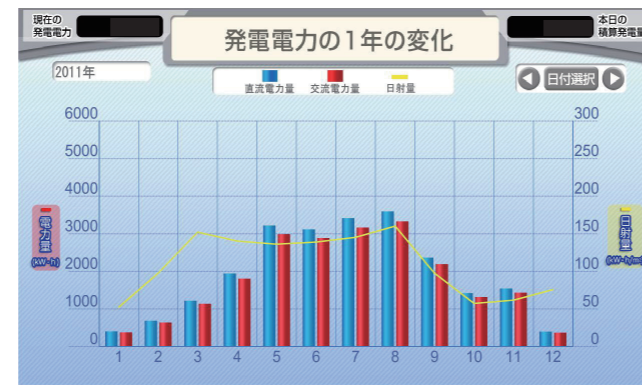
2012年度 発電量24,290kW・h



2013年度 発電量24,349kW・h



2010年度 発電量27,160kW・h



2011年度 発電量23,760kW・h

グリーン購入・調達状況

本学では、「国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律(グリーン購入法)」の規定に基づき、毎年度その調達実施に向けての方針を決定し、環境負荷低減に資する環境物品等の調達に努めています。今後とも基本方針を遵守し、環境負荷等の少ない物品等の調達に努めていきます。

■特定調達物品の調達量

分野	適用(品目)	全調達量	特定品目調達量	特定品目調達率(%)
紙類	コピー用紙等	86,919kg	86,835kg	99.90
文具類	シャープペンシル等	142,317点	142,208点	99.92
オフィス家具等	いす等	999台	999台	100.00
OA機器	コピー機等	3,881台	3,877台	99.90
	記録用メディア、電池、電卓、トナー、インクカートリッジ、掛時計等	37,884個	37,884個	100.00
家電製品	電気冷蔵庫等	17台	17台	100.00
エアコンディショナー等	エアコンディショナー、ストーブ	2台	2台	100.00
照明	蛍光灯照明器具等	3,042本	3,041本	99.97
自動車	一般公用車等	1台	1台	100.00
	ETC、カーナビ等	2個	2個	100.00
制服・作業服	制服等	2,249着	2,162着	96.13
インテリア・寝装寝具	カーテン等	568点	568点	100.00
作業手袋	作業手袋(防災用を含む)	10組	10組	100.00
その他繊維製品	集会用テント、幕、モップ等	29枚	29枚	100.00
災害備蓄用品	飲料水、乾パン、缶詰等	34,464個	34,464個	100.00
役務	印刷等	10,919件	10,043件	91.98

旭川市の気象条件

単位:日(ただし積雪量・降雪量(cm)は除く)

	2010年度					2011年度					2012年度					2013年度				
	日平均気温	日最高気温	日最低気温	積雪	降雪	日平均気温	日最高気温	日最低気温	積雪	降雪	日平均気温	日最高気温	日最低気温	積雪	降雪	日平均気温	日最高気温	日最低気温	積雪	降雪
25℃以上の日数	10	85				9	69				10	81				8	73			
28℃以上の日数	1	44				0	32				0	39				0	47			
30℃以上の日数	0	16				0	16				0	18				0	20			
32℃以上の日数	0	4				0	3				0	4				0	2			
35℃以上の日数	0	0				0	0				0	0				0	0			
0℃以下の日数	112		159			128		161			129		155			114		149		
-10℃以下の日数	8		48			27		71			23		61			15		48		
-15℃以下の日数	0		8			0		34			3		32			5		17		
-20℃以下の日数	0		1			0		7			0		4			0		6		
-25℃以下の日数	0		0			0		0			0		0			0		0		
積雪日数				138				140					153					147		
最深積雪量 (cm)				67				94					108					89		
降雪日数					98				96					105						87
日最大降雪量 (cm)					28				18					37						23
累積降雪量 (cm)					533				532					596						541

事業活動に伴う 環境負荷低減への取り組み

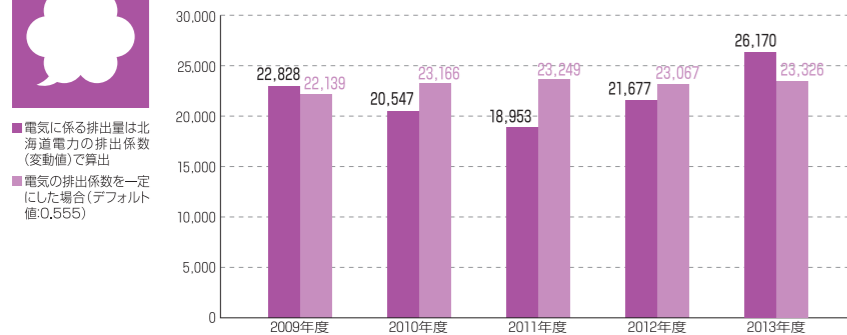
エネルギー・資源の使用量 (2009年度～2013年度 5カ年の推移)

本学におけるエネルギー・資源の使用量に対する推移を、過去5年間分のグラフで表示しました。

エネルギーの使用量については、前年度(2012年度)に比べて講義実習棟及び病棟の一部改修などでGHPによる空調面積は増加の傾向にあり、また前年度は自家発電機の冬季操業調整契約等の常用運転を実施していないため、購入電力量は7.8%増加し、ガスの使用量が-3.6%の減となっており、CO₂の排出量は前年度比20.7%の増加となっています。

増加の原因は、電気事業者の排出係数が大きく変動したことによるところが大きいと考えています。

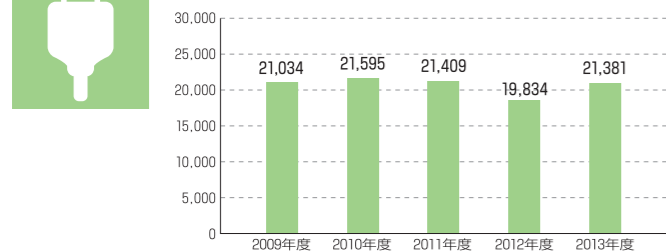
温室効果ガス(CO₂)排出量(t-CO₂)



CO₂排出量の過去5年間の推移はグラフのとおりですが、原子力発電所の運転停止に伴い、電気事業者のCO₂排出係数の変動(※1)により、前年度比20.7%の増加となりました。電気事業者の排出係数は、毎年の実績に基づいて係数を決定しているため、電力を使用している事業者の実情が数字に表れていないため、排出係数を一定(※2)にして、参考までに対比してみましたが、微増で推移しています。

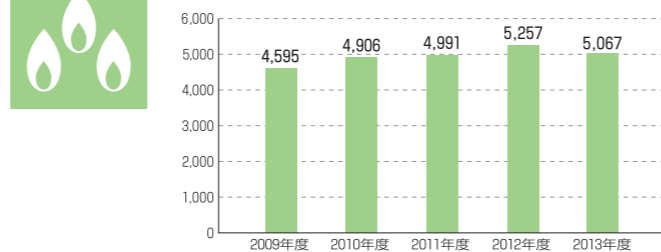
(※1)北海道電力(株)の排出係数(kg-CO₂/kWh)
 2009年:0.588 2010年:0.433 2011年:0.353
 2012年:0.485 2013年:0.688
 (※2)一定にした電力の排出係数(kg-CO₂/kWh)
 デフォルト値:0.555を使用して算出

購入電力量(千kW・h)



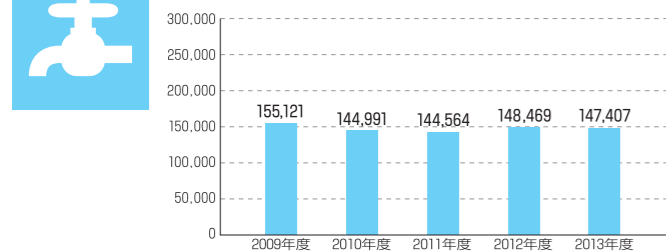
今年度は、電力会社との冬季操業調整契約による自家発電機の常用運転を実施していないため、購入電力量は前年度比7.8%増加しましたが、2011年度比-0.1%となっています。

ガス使用量(千m³)



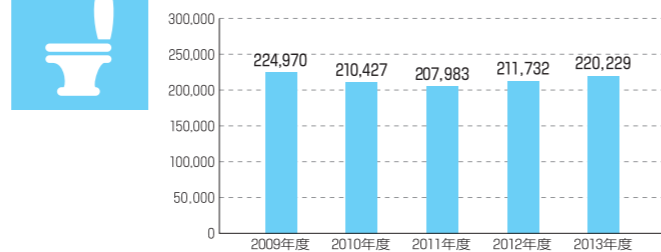
今年度は、改修工事などによるGHPの空調面積増加により、ガス使用量も増加傾向にあります。自家発電機の常用運転を実施していない分、ガス使用量は前年比-3.6%の削減となりました。2011年度に比べると、1.5%増となっています。

上水道使用量(m³)



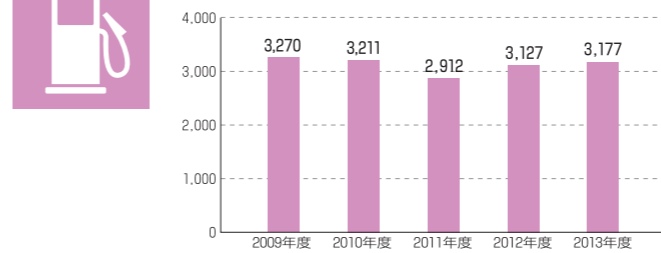
改修工事などで、節水機器の積極的な導入を進めています。これらの効果の結果、前年度比-0.7%削減となりました。

下水道使用量(m³)



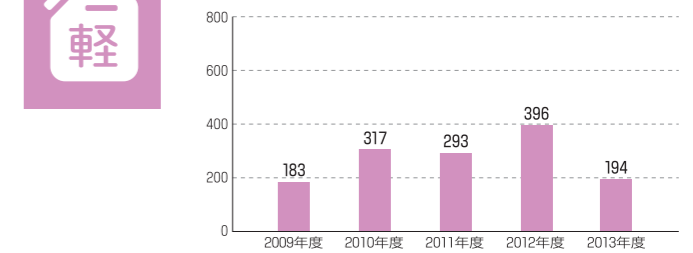
本学のトイレなどの洗浄水は、井戸水を使用しているため、上水道の使用量とは一致しません。上水道の削減に反し、患者数の増加を含め、トイレをはじめとする洗浄水の使用増加により、前年度比4%の増加となりました。

ガソリン使用量(L)



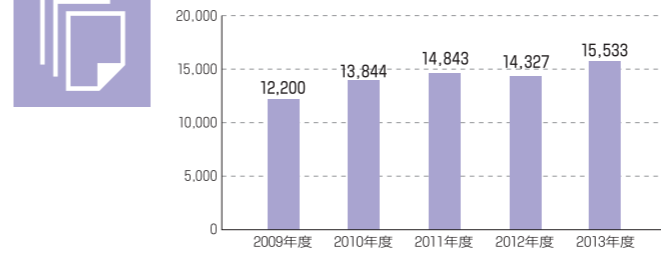
ガソリンを使用している公用車・救急車の運行距離は昨年と同様でしたが、前年度比1.6%増加となりました。

軽油使用量(L)



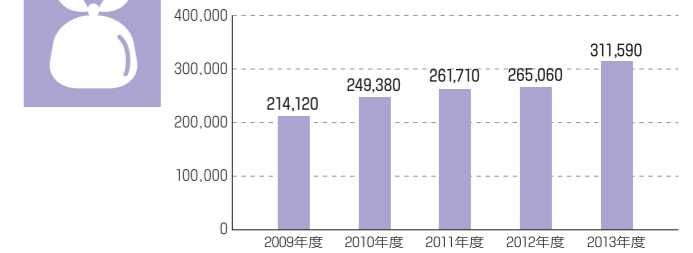
軽油の購入量は、前年度比-51%の削減となっていますが、これは昨年度末に購入した在庫が残っていたことと、1日の降雪量が少ない時は手作業で除雪を行い、除雪機の使用回数・稼働時間が減少したためと考えられます。

コピー用紙(千枚) コピー用紙は、A3-A4-B3-B4の合計枚数です。



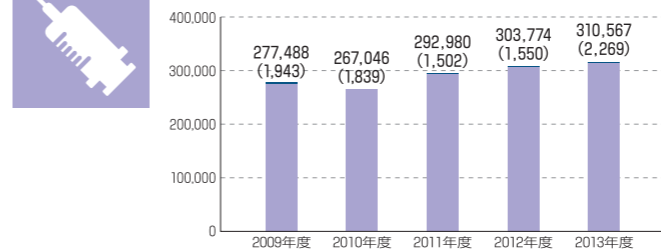
両面コピー、文書のスリム化に努めていますが、業務量は年々増加傾向にあり、昨年度は講座等での会議数が増加したことにより、使用枚数が前年度比8.4%の増加となりました。

一般廃棄物(kg)



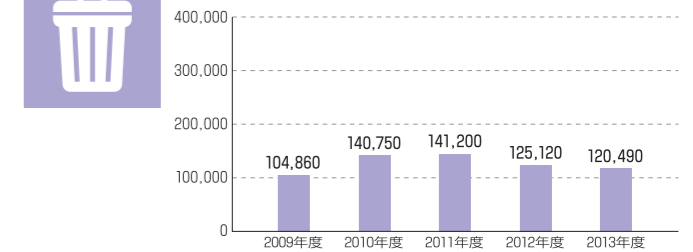
講座実習棟改修工事(Ⅱ期)に伴う講座の移転時に発生する不要物品等をはじめとする各種工事等に伴うゴミの発生量が多く、前年度比17.6%の増加になったものと考えています。

感染性廃棄物(kg) ()内は実験用動物で内数



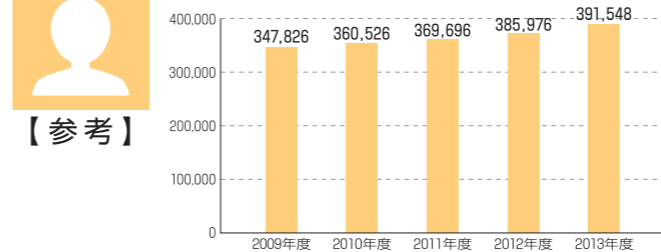
感染性廃棄物は、実験用動物とともに廃棄量が増加しています。患者数の増加及び動物実験の増加など実験内容の変更等により前年度比2.2%増加したものと考えています。

非感染性廃棄物(kg)



非感染性廃棄物は、前年度比-3.7%に削減しました。患者数は増加していましたが、病院内におけるゴミの分別及び啓発活動等による取組が削減に寄与したものと考えています。

外来患者数(人)



過去5年間の外来患者数の推移をグラフで表示しました。平均で毎年、約3%程度の増加となっています。

【参考】

認定証・指定書 第三者意見

大学機関別認証評価認定証



認証評価認定マーク



学校教育法第109条第2項の規定に基づき、(独)大学評価・学位授与機構による「大学機関別認証評価」を受け、平成20年3月27日付けで「大学評価基準を満たしている」との認定を受けました。

ホスピレート認定証



NPO法人イージェイネットによる、「女性医師を含むすべての医療従事者が安心して働くことができる病院」という観点から病院の働きやすさを評価・認証する「働きやすい病院評価(HOSPIRATE)」の認証を受けています。

第三者意見



株式会社北洋銀行
経営企画部統括審議役

小澤 正明 氏

〈主な職歴〉
札幌市北区長、札幌市助役、札幌市副市長
平成24年6月 北洋銀行常務執行役員経営管理部審議役兼CSR推進室長
平成26年4月 北洋銀行経営企画部統括審議役

旭川医科大学は、「地域医療に根ざした医療および福祉の向上」を理念に、1973年に建学されました。以来40年余、北海道における医療・福祉を担う、地域になくなくてはならぬ重要な医学拠点として、その役割を果たしてきています。「環境報告書2014」には、旭川医科大学がミッションをどのように位置づけ具体化しているかが、分かりやすくかつ使命感にあふれた内容で公開されています。

【評価できる点】

1. 大学および病院の理念と目標を明確に定めています。また、地球環境の保全も重要な課題ととらえて環境方針と目標を明確にし、活動の評価も実施しています。チャレンジする方向が明らかにされ、学長挨拶においても力強く宣言されており、強い意志を感じることができます。

2. 高いレベルの医療人育成や地域に密着した高度医療の病院運営を行うとの理念に基づいた活動が、幅広くかつ的確に実施されています。これらの活動は、地域・学生・医療人とその家族などのステークホルダーと、いかに良好で価値ある関係を築いていくかという目線からなされていると言えます。活動の成果は、かけがえのない財産として時空を超えて新たな価値を創造していくと思われれます。特に印象に残る活動は次の通りです。

- ①大学入学前の高校生から、学生、医療人と成長段階に合わせた目標設定を支援しています。これにより地域を担う高いレベルの「ふるさと医療人」育成が期待できます。
- ②二輪草センターにおいてバックアップナースシステムや預かり室などが整備されています。子育てを支援する働きやすい学びやすい環境が確保され、各人が持てる力を存分に発揮することができます。
- ③遠隔医療、救命救急医療、国際医療貢献ならびに各種災害への準備訓練などに積極的に取り組んでいます。地域の安心を確保するだけでなく、海外における医療・福祉の向上に寄与しています。
- ④地域住民に対する各種講座や教室が開催され、予防医療も含めた地域医療が実践されています。

3. 環境配慮活動としては、自然豊かな北海道との調和に配慮した項目に取り組んでいます。さらに、各項目における年度毎の活動状況評価を実施しており、PDCAサイクルとして循環的に取り組んでいく高い意欲を感じることができます。

4. 活動は「教育・研究」「病院運営」「社会・国際貢献」「環境配慮活動への取り組み体制」「事業活動に伴う環境負荷低減への取り組み」という5つの面から、体系的に分かりやすく公開されています。

【今後の活動への期待】

高齢化の進行により、医療・福祉への関心やニーズは年々確実に高まってきています。また、2040年には全国市町村の半分において、その存続が難しくなるとの予想もなされています。旭川医科大学における活動は、北海道が今後も安心して住み続けられる地域となるための取り組みでもあります。ふるさと医療人育成、二輪草センター、遠隔医療等への認知をさらに広げるとともに、次世代に自信をもって引き継ぐことができる北海道の力となることを、期待をもって見守りたいと思います。

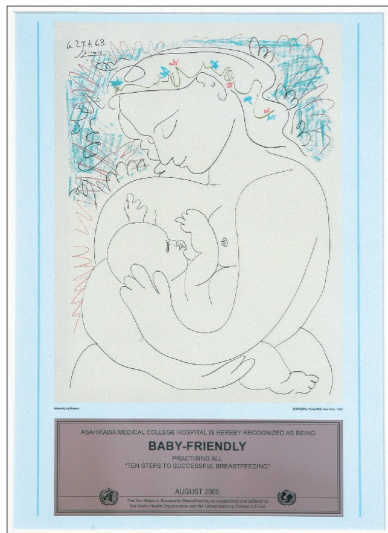
環境報告書の作成に当たって

この「旭川医科大学環境報告書2014」は以下により作成しています。

- 参考にしたガイドライン／環境省「環境報告ガイドライン2012年版」
- 対象組織／旭川医科大学
- 対象期間／平成25年4月～平成26年3月
- 発行期日／平成26年9月
- 次回発行予定／平成27年9月

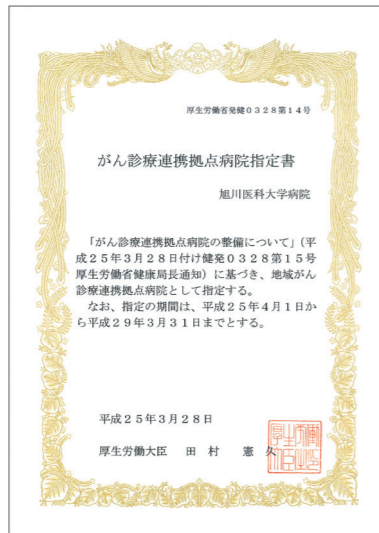
作成部署お問い合わせ先
旭川医科大学総務部施設課
〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号
TEL (0166) 68-2165 FAX (0166) 68-2169
E-mail / s-manage@asahikawa-med.ac.jp
この環境報告書はホームページでも公表しています。
HPアドレス <http://www.asahikawa-med.ac.jp/>

赤ちゃんに優しい病院認定証



WHO・ユニセフによる「母乳育児を成功させるための10カ条」を遵守・実践する「赤ちゃんに優しい病院」(Baby Friendly Hospital)に認定されています。

がん診療連携拠点病院指定書



全国各地でも質の高いがん医療を提供できるよう、厚生労働大臣により指定された病院を示します。本院は地域がん診療連携拠点病院に指定されています。

病院機能評価認定証



公益財団法人日本医療機能評価機構の定める基準を満たし、組織的に医療を提供するための基本的な活動の実施が認定されています。

ドクターヘリ施設認定証



結び | 編集後記

旭川医科大学では、本学環境方針に則り、地球環境や地域環境の保全・改善のための教育・研究、診療および開かれた大学としての社会貢献など、すべての活動を通して環境との調和と環境負荷の低減に積極的に取り組んでいます。

ここに「環境報告書2014」を公表いたします。

今後とも環境保全・改善活動を推し進めてまいります。

—表紙の説明—

旭川医科大学が開学した昭和48年11月の秋をイメージし、ブランドマークを組み込んだ校舎の写真を、美しい地域の風景写真の上に配しました。地域に溶け込みながら地域をリードしていく旭川医科大学を表現しています。



国立大学法人

旭川医科大学

〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号
TEL 0166(65)2111 FAX 0166(68)2169
<http://www.asahikawa-med.ac.jp/>

